

日 本 独 文 学 会 研 究 叢 書 161

ドイツ語のノモスとテシス
——ドイツ語の「正しさ」と多様性——

高橋 秀彰 編

一般社団法人日本独文学会

Studienreihe der Japanischen Gesellschaft für Germanistik 161

Nomos und Thesis im Deutschen

– „Korrektheit“ und Diversität in der deutschen Sprache –

Herausgegeben

von

Hideaki TAKAHASHI

JGG Tokyo

目次

はじめに

高 橋 秀 彰 viii

発表論文

メンテリーン聖書手書き写本における「旧表記」の「首尾一貫性」と「汎用性」

井 出 万 秀 1

19世紀初頭ウィーンにおける言語規範と言語使用 —— ベートーヴェンの筆談帳におけるリテラシーの違いに注目して

佐 藤 恵 11

変遷するドイツ語標準発音 —— テシスとノモスから見る発音規範の考察

高 橋 秀 彰 31

Geschlechtergerechte Sprache? – *gndern* のノモスとテシス

田 中 慎 50

シンポジウムにおけるディスカッション

..... 61

INHALTSVERZEICHNIS

Einleitung

Hideaki TAKAHASHI.....viii

Abhandlungen

„Konsistenz“ und „Allgemeinheit“ der älteren Schreibung in den Abschriften des Mentelin-Bibeldrucks

– Zur Schreibung der neuhochdeutschen Diphthongierung und Monophthongierung in der „vor-Thesis-Zeit“ –

Manshu IDE.....1

Sprachnorm und Sprachgebrauch im Wien des frühen 19. Jahrhunderts

– Facetten der Schreibfähigkeit in Beethovens Konversationsheften

Megumi SATO.....11

Deutsche Standardaussprache im Wandel – eine Überlegung über die Aussprachenormen aus der Betrachtung von Nomos und Thesis

Hideaki TAKAHASHI31

Geschlechtergerechte Sprache? – Nomos und Thesis bei Gendern

Shin TANAKA.....50

Diskussion

.....61

本叢書は、春季・秋季研究発表会におけるシンポジウムの記録のため、日本独文学会が（2017年以降は学会ホームページにおいて）発表の場を提供しているものです。叢書の編集は、学会編集委員等による査読制をとらず、各編集責任者に完全に任せています。

Mit der Studienreihe (SrJGG) bietet die Japanische Gesellschaft für Germanistik den einzelnen Veranstaltern der Symposien in den Frühlings- und Herbsttagungen die Möglichkeit, die Beiträge und die Diskussions-inhalte der Symposien zu dokumentieren und (seit 2017 im Internet) zu publizieren. Die Artikel sind nicht von der JGG-Redaktion peer reviewed, sondern werden ausschließlich vom jeweiligen Herausgeber wissenschaftlich-redaktionell zusammengestellt.

はじめに

高橋 秀彰

本書は、2024年10月19日に行われた日本独文学会秋季研究発表会におけるシンポジウムの成果をまとめたものである。

言語はことば共同体内の使用の積み重ねを通じて慣習化されると、それはノモス（規範）として人々の言語意識に影響を及ぼすことになる。こうしたノモスを記述する行為には記述者の意思も不可避であるが、記述された体系はテシスとして言語の「正しさ」の基準としての意味を持ち始めるのである。ここでいうノモスとテシスは、それぞれ慣習によって構築される *nomos* と人間の決定によって慎重に構築される *thesoi* に由来し、それぞれ人間の行為（action）により創造される結果と、人間の構想（design）により創造される結果（Hayek 2013: 20）に対応している。本シンポジウムでは、ドイツ語のノモスとテシスの関係性に着目し、標準ドイツ語の成り立ちとその「正しさ」を説明することを目的とする。

ドイツ語で「正しさ」が公的に規定されているのは、正書法だけである。それでは、公的規則が存在しない文法や発音の規則は、ノモスとしてどのような意味を持つのだろうか。コーパス分析による量的研究を行えば、変異形（Variante）の出現頻度を得ることができるが、複数の形式が確認された場合には、量的に最も多く確認された形式を「正しい」用法と見なすことはできるのだろうか。量的研究だけで判断できない部分があるとすれば、どのように「正しさ」を考えればいいのだろうか。近代言語学では記述主義がその根本原則として受け入れられ、言語使用の「正しさ」の判断に言語学者は関与しないことが慣例となっている。しかし、辞典類には言語研究の成果をもとに実際の言語使用を記述しているだけであるとすれば、そこには規範性は存在しないのだろうか。こうした問題を各発表者が次の観点から考察する。

第1発表（井出）では、15世紀からの文字表記の変遷を考察し、ドイツ語の諸方言の記述を分析することで、新しい表記法への移行の状況を詳細に描写した。1466年に活版印刷で出版されたドイツ語初の新旧約聖書、いわゆる「メンテリーン聖書」を1500年以前に手書きで書き写した写本の創世記最初の10章を、新高ドイツ語二重母音化、新高ドイツ語単長母音化がどのように表記されているかに基づき、中高ドイツ語の母音体系に基づく「旧表記」と新高ドイツ語の母音体系に基づく「新表記」の首尾一貫性を検証すると、方言によって大きな差違が見られ、文字表記レベル全体として旧表記での首尾一貫性が最も高い方言はアレマン方言で、新表記での首尾一貫性が最も高い方言はフランケン方言であり、シュヴァーベン方言、東シュヴァーベ

ン方言、バイエルン方言は首尾一貫性が言語レベルによってばらつきがある。該当する二重母音化すべてが同じ移行状態を示すわけではなく、また一定の傾向を見出すことが難しい。逆に、文法パラダイムに根ざす過去形母音においてはフランケン方言を除いてその他の方言すべてほぼ旧表記のままである。語彙レベルで機能語と一般語彙を区別すると、機能語においては前置詞が旧表記の首尾一貫性が高く、所有冠詞と人称代名詞は一般語彙と同様な状況を示し、それはアレマン方言では旧表記の首尾一貫性が最も高く、フランケン方言では新表記の首尾一貫性が最も高く、その他の方言は首尾一貫性に搖れが大きい。例えば東シュヴァーベン方言は前置詞を除く語彙レベルでは新表記の首尾一貫性が高い。シュヴァーベン方言では、一方ではハイデルベルク写本のように旧表記の首尾一貫性がかなり高いものもあれば、ベルリン写本のように旧表記の首尾一貫性が低いものもある。このことから、表記選択の決定的な要因は、地理と時間のみではなく、社会文化的な要因も想定される。例えばハイデルベルク写本は旧約聖書のみであるが、当時の聖書としてはイラストの挿入頻度が非常に高く、クオリティーの高い写本であり、「聖書」というテキストジャンルにふさわしい古来からの威厳を旧表記に託していると考えられないこともない。

第2発表（佐藤）ではベートーヴェンの筆談帳を言語資料とし、社会的属性（職業・教育の程度等）と異形（Variante）選択との対応関係について考察を行った。まずは1774年の一般学校教育令によって学校教育改革と言語教育政策がどのように行われたのかを概観し、19世紀前半のウィーンにおいて学校教育を受けたベートーヴェンの甥カールの言語使用を調査した。1794年に出版された教師用の学習指導書において正しい例として挙げられている *ging*（非標準形 *gieng*）、*Brot*（非標準形 *Brodt*）、*Lection*（非標準形 *Lekzion*）、*Classe*（非標準形 *Klasse*）、*practisch*（非標準形 *praktisch*）の出現状況を調査したところ、甥カールは筆談帳において、*ging*（11例）、*Brot*（20例）、*Lection*（15例）、*Classe*（17例）、*practisch*（2例）のように、一貫して教科書が指定した通りの「正しい」綴りで書いていることがわかった。以上のことから、少なくとも今回の調査項目に関する限り、当時の学校教育の中で媒介されたテシスが甥カールの実際の言語使用に強く反映されていたということが示唆される。甥カールが通っていたのは、ウィーン市内に *Normalschule*（師範学校）第1号として設置された学校である。マリア・テレジアとヨーゼフ2世統治下で教育制度が整備され、国語教育改革が推進された19世紀初頭ウィーンにおいて初等教育を受けた甥カールは、学校教育を通じて、最も純粹な形でテシスを身につけた存在であるといえる。

第3発表（高橋）は、19世紀後半に近代国家が建設されてから、国家によるドイツ語の標準化が進められた軌跡をたどり、今日の標準発音のノモスとテシスの関係性を分析した。現代ド

イツ語の標準化の過程においては発音の体系的な記述も幅広く行われてきたが、その際には国別の特徴にも配慮されている。こうした記述の規範性について考察する。ドイツ語の発音規範は舞台発音 (Bühnenaussprache) を基盤として記述されてきた。演劇団はドイツ語圏各地を移動しながら、観客全体に理解されうる明確な発音を心がけながら活動していた。各地での公演を通じて、どの地域でも理解される中立的な発音が発展することとなった。しかし、科学技術の発展とともに、ラジオやテレビの放送が普及し、マスメディアで使用される発音が標準発音の模範とみなされるようになり、発音辞典の編纂にも大きな影響を及ぼした。こうして作成されたテシスは、模範話者を通じて一般に普及した。また、ドイツ語は複数の国家で公用語として使用されているが、それぞれの模範話者の発音は国家ごとに異なる色合いがあることから、国別標準変種を反映していると考えられ、複数の国別標準変種が記述されることになった。他方、各地域の方言は標準変種の影響を受けながら変化し、地域ごとに公的な場面で使用される変種が生成されてきた。こうしたノモスは使用標準 (Gebrauchsstandard) と位置付けられ、Duden は記述の対象としている。しかし、こうしたノモスには多様性が残るので、テシスに含めるべきノモスに関する考察が必要なはずである。高橋発表では、この点について批判的に考察し、ノモスの基盤となる模範話者とその階層性について分析した。

第4発表（田中）では、*gendern* を題材にノモスとテシスの関係を問い合わせた。その出発点として、まず *gendern* の現状を概観し、それについてのシステム言語学的知見（記号体系のシステムとしての言語という観点から得られるもの）について考察を行った。その結果は以下の2点にまとめられる。

- ・システムとしての言語という観点からは、現状の *gendern* を推進する意味が見出せない。
- ・*gendern* の様々な方策は意味がないか、変更には大きな労力が必要とされ、多くのドイツ語話者には受け入れられにくい。

一方で、*gendern*において指示の対象は人間であり、この指示対象自身は、無視（不可視化）されているなど、適切な扱いを受けていないと感じているという現状がある。そのため、*gendern* の議論は、システム言語学的視点を超えた規範としての言語について考察を進める必要があることが示された。そして、本シンポジウムの主要概念であるノモス-テシスの概念の区別とともに、以下の問い合わせが導かれた。

- ・ノモス（慣習的規範）なきテシス（取り決め的規範）は可能か？

- ・言語規範を意図的に変えることによって現実は変わらるのだろうか？

この問い合わせについての解決を探るべく、ドイツ語圏で提示されているいくつかのテシス (gendern に関する様々な Leitlinien) について考察を進めた。また、規範のさまざまな形を分析することにより、どのような規範が gendern をめぐる現状において適用されているのか、あるいはまた適用されるべきなのかという問題について整理を進めた。その際、規範の性質 (推奨、規制、強制など)、規範の場面 (公的・私的)、規範の定め手、規範の対象などが規範の変数として考察対象にされるべきであるということを概観した。

以上の考察を通じて、テシスとノモスの関係性と、言語の「正しさ」について討論した。

Hayek, F. A. (2013). *Law, legislation and liberty*. London & New York: Routledge.

„Konsistenz“ und „Allgemeinheit“ der älteren Schreibung in den Abschriften des Mentelin-Bibeldrucks

– Zur Schreibung der neuhochdeutschen Diphthongierung und Monophthongierung in der „vor-Thesis-Zeit“ –

Manshu IDE

0. Einleitung

Der vorliegende Beitrag befasst sich mit der Konsistenz der älteren oder neueren Schreibung der mittelhochdeutschen (mhd.) Monophthonge und Diphthonge in der frühneuhochdeutschen (frnhd.) Zeit, einer „vor-Thesis-Zeit“ ohne ausdrückliche metasprachliche Regelung. Exzerpiert werden die ersten 10 Kapitel in der „Genesis“ des ersten deutschsprachigen Vollbibeldrucks aus dem Jahr 1466 der elsässischen Offizin von Johannes Mentelin, des sog. „Mentelin-Bibeldrucks“ (abgekürzt als „Mntl“) sowie dessen Abschriften, deren dialektale Lokalisierung wie auf Tabelle 1 aussieht¹. Von der Nürnberger Handschrift Solg. MS. 16.2⁰ wird hier abgesehen, da sie die „Genesis“ nicht enthält.

Die Schreibung der nhd. Diphthongierung, die sich im 15. Jahrhundert aufgrund der graphematisch realisierten nhd. Diphthongierung sowie Monophthongierung in die ältere mhd. Schreibung wie *mîn hûstiufel* sowie *liebe guote brüeder*² und in die neuere nhd. wie *mein hausteufel* sowie *liebe gute brüder*³ unterscheiden lässt, kommt hier in Betracht. Gemessen wird ihre „Konsistenz“, inwieweit die eine oder die andere Schreibung konsequent Anwendung findet, wobei sie in Bezug auf die Sprachebenen – zu denen die graphematische, die lexikalische und die grammatische Ebene zählen – differenziert ausgewertet wird.

Die Aufmerksamkeit richtet sich hauptsächlich auf die nhd. Diphthongierung, da die frnhd. Schreibung der nhd. Monophthonge *i* und *ü* keine eindeutigen Rückschlüsse auf deren vokalische Länge zulässt. So

1 Manshu Ide (2018): Abschriften des Mentelin-Bibeldrucks. Zur Funktion handschriftlicher Überlieferung im Zeitalter des Buchdrucks. In: *Neue Beiträge zur Germanistik*, 155 (2017), S. 146-165. Hier S. 148. (https://www.jstage.jst.go.jp/article/jgg/155/0/155_146/_pdf/-char/ja). Die Angaben für die Handschriften von 1 bis 6 beruhen auf Handschriftencensus: <https://handschriftencensus.de>. (2025.04.07). Die Angaben für Dialekt sowie die Entstehungsjahr für die Handschrift 7 beruht auf den Daten aus: Stadtbibliothek im Bildungscampus Nürnberg Virtuelle Schatzkammer. (https://online-service.nuernberg.de/viewer/searchadvanced/-/2528U002B%2528PI_TOPSTRU CT%253A%2528252807123724%2529%2529%2529/1/RELEVANCE/-/) (2025/04/01)

2 Robert Peter Ebert/Oskar Reichmann/Hans-Joachim Solms/Klaus-Peter Wegera (1993): *Frühneuhochdeutsche Grammatik*. Tübingen: Max Niemeyer (= Sammlung kurzer Grammatiken germanischer Dialekte: A, Hauptreihe; 12), § L 26, L28, L29.

3 Ebert/Reichmann/Solms/Wegera (1993), § L 21, L 24, L25.

Dialekt	Institut	Signatur	EJ	ABK
1. Schwäbisch	Heidelberg, Universitätsbibl.	Cpg 16, 17, 18	1477	HD (schw)
2. Ostschwäbisch	München, Staatsbibl.	Cgm 204	vor 1473	
		Cgm 205	1472	M (o-schw)
3. Alemannisch	Basel, Universitätsbibl.	Cod. AN II 36-37	15. Jh.	BSL (alm)
4. Schwäbisch	Berlin, Staatsbibl.	Mgf 676-678	1470	B (schw)
5. Bairisch	[a] Wolfenbüttel, Herzog August Bibl.	Cod. 1. a Aug. 20	1481	
	[b] Wolfenbüttel, Herzog August Bibl.	Cod. 1. b. Aug. 20	1481	WBB (bai)
6. Fränkisch-Bairisch	Wolfenbüttel, Herzog August Bibl.	Cod. 1. 6. 1 Aug. 20	1471	WBF (frk)
7. Schwäbisch (?)	Nürnberg, Stadtbibl.	Solg. MS. 16.20	2/2 15. Jhs.	

EJ: Entstehungsjahr; ABK: Abkürzung

Tabelle 1: Dialektale Lokalisierung der überlieferten Abschriften des Mentelin-Bibeldrucks

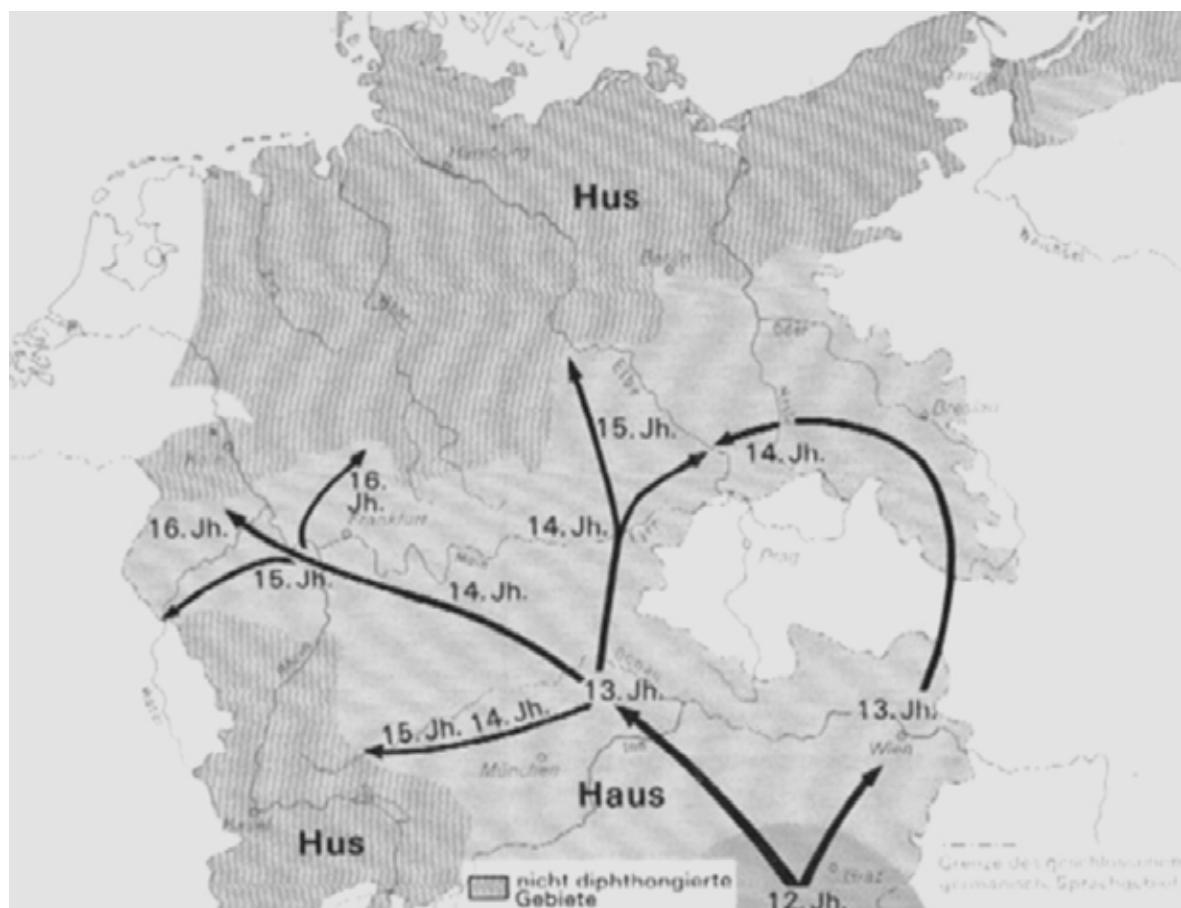


Abb. 1: Ausbreitung der nhd. Diphthongierung in schriftlichen Zeugnissen

(*dtv-Atlas zur deutschen Sprache*,⁴ 1981, S.146)

„Konsistenz“ und „Allgemeinheit“ der älteren Schreibung in den Abschriften des Mentelin-Bibeldrucks bleibt unklar, ob 1) *i* einen Langvokal [i:] – heute in der Regel als *ie* geschrieben – oder einen Kurzvokal [i] bezeichnet, oder ob 2) das Diakritikon *ü* für den Diphthong *uo* bzw. für einen langen Vokal *u* [u:] steht.

Auf graphematischer Ebene werden sämtliche kritische Stellen ausschließlich als Buchstabenfolge untersucht, um festzustellen, ob sie der älteren oder der neueren Schreibung entsprechen. Die lexikalische Ebene überprüft das jeweilige Lexem, das die kritischen Stellen enthält, daraufhin, ob es durchgehend in der älteren oder der neueren Schreibweise erscheint. Schließlich analysiert die grammatische Ebene die kritischen Stellen innerhalb grammatisch gewandelter Formen in den Ablautreihen I a und VI.

1. Ausbreitung der bigraphischen Schreibung der nhd. Diphthongierung

Die geographische und chronologische Ausbreitung der neueren bigraphischen Schreibung der nhd. Diphthongierung der mhd. Monophthonge sieht anhand des Übergangs von *ü* zu *au* gemäß dem *dtv-Atlas zur deutschen Sprache* wie in Abb. 1 aus. „Bigraphisch“ bzw. „Bigraphie“ meint Schreibung eines Diphthongs mit zwei Buchstaben.

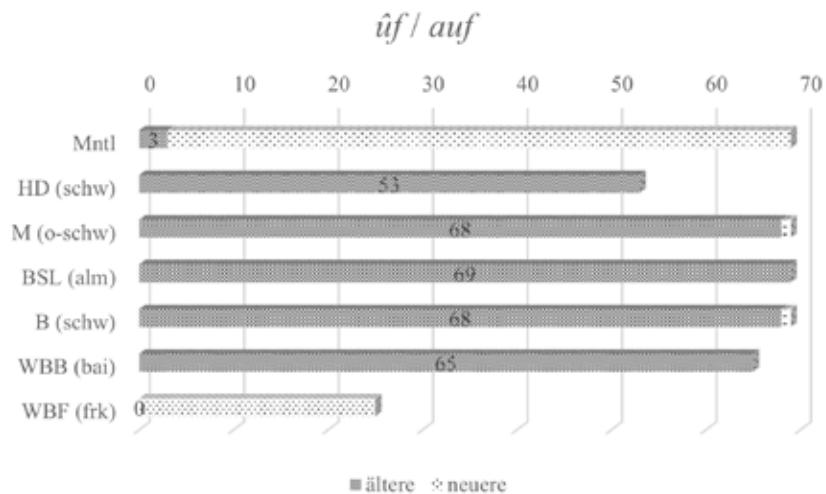
Die Auswertung ergibt, dass sich die Ausbreitung nicht so einfach auf die Faktoren Ort und Zeit zurückführen lässt wie in der Abbildung. Zudem stimmt die Datierung der neueren Schreibung in der Abbildung mit dem Befund hier nicht immer überein, was eine differenzierte Verfolgung der nhd. Diphthongierung je nach der Sprachebene oder dem sozio-kulturellen Umfeld der Schrift erforderlich erscheinen lässt.

2. Ergebnisse

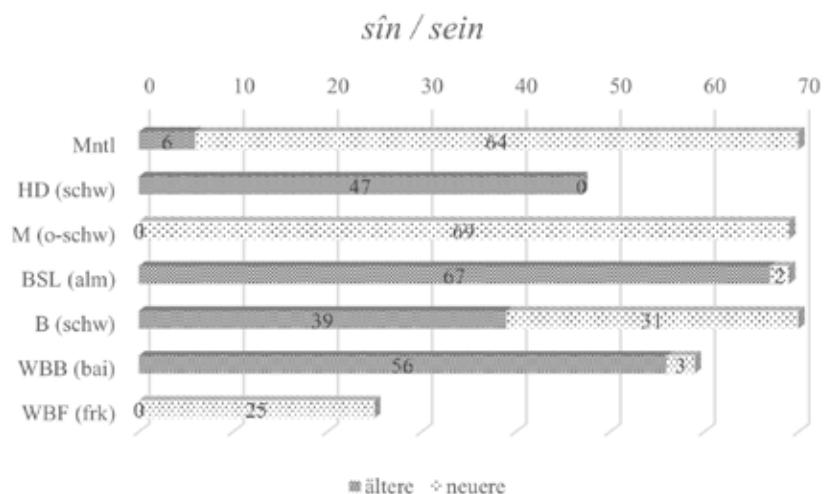
Aus der Analyse der kritischen Stellen ergeben sich folgende Befunde:

1. Die dialektalen Unterschiede in der Schreibkonsistenz bilden zwei Pole, bei denen zum einen das Alemannische (BSL (alm)) in der älteren Schreibung und zum anderen das Fränkische (WBF (frk)) in der neueren Schreibung jeweils die höchste Konsistenz aufweisen. Zwischen diesen beiden Polen schwanken das Schwäbische (HD (schw), B (schw)) und das Ostschwäbische (M (o-schw)) in ihrer Konsistenz. Allerdings unterscheidet sich das Schwäbische der Heidelberger Handschrift (HD (schw)) von dem der Berliner Handschrift (B (schw)) durch seine hohe Konsistenz in der älteren Schreibung.
2. Von den Funktionswörtern kommen bei den Possessivartikeln sowie dem Personalpronomen genauso häufig die neuere Schreibung vor wie bei den Semantika. Bei den Präpositionen hingegen überwiegt die ältere Schreibung. Dieser könnte ein gewisser „Schibboleth“-Effekt zugeschrieben werden. Sie würde

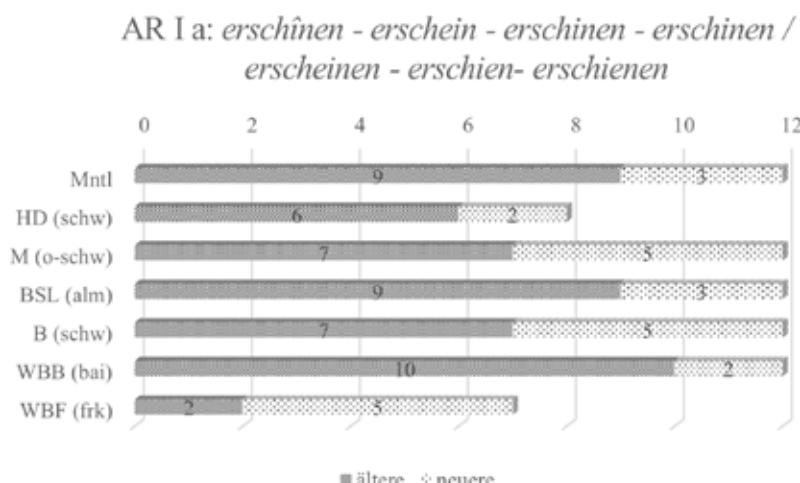
Manshu IDE



Graphik 1: Distributionstyp A der älteren und der neueren Schreibung



Graphik 2: Distributionstyp B der älteren und der neueren Schreibung



Graphik 3: Distributionstyp C der älteren und der neueren Schreibung

„Konsistenz“ und „Allgemeinheit“ der älteren Schreibung in den Abschriften des Mentelin-Bibeldrucks

damit in den Präpositionen – bewusst oder unbewusst – als ausgeprägtes dialektales Kennzeichen dienen.

3. Die Konsistenz in der älteren Schreibung bewährt sich auf der grammatischen Ebene, genauer im Konjugationsparadigma.

4. Die Distribution der älteren und der neueren Schreibung lässt sich graphisch in drei Typen gliedern. Distributionstyp A auf Graphik 1 zeichnet sich bis auf den Mentelin-Bibeldruck (Mtln) und das Fränkische (WBF (frk)) durch eine hohe Konsistenz in der älteren Schreibung aus. Distributionstyp B auf Graphik 2 lässt stark dialektale Unterschiede erkennen, indem das Alemannische (BSL (alm)) und das Bairische (WBB (bai)) eine höhere Konsistenz in der älteren Schreibung aufweisen. Demgegenüber zeigt das Schwäbische in der Konsistenz eine Schwankung. Damit erweist sich das Schwäbische der Heidelberger Handschrift (HD (schw)) in der älteren Schreibung verhältnismäßig als konsistent, das der Berliner Handschrift (B (schw)) als inkonsistent. Distributionstyp C auf Graphik 3 ist bei fast allen Dialekten die ältere Schreibung relativ konsistent.

Über den Übergang zur neueren Schreibung sowie deren Konsistenz und das Beibehalten der älteren sowie deren Konsistenz lässt sich pauschal, d.h. undifferenziert auf alle kritischen Stellen bezogen, keine allgemeine Aussage treffen, weil dazu die Differenzen der Schreibkonsistenz je nach Sprachebenen zu groß wären.

2.1 Graphematische Ebene

Die Schreibung der mhd. Monophthonge, die über den nhd. Lautwandel zu Diphthongen werden – *î* zu *ei*, *û* zu *au* und *iu* zu *eu* – schreitet nicht gleichmäßig voran, sondern je nach Diphthong verschieden. So zählt *î* zu *ei* sowie *iu* zu *eu* zum Distributionstyp B (s. Graphik 2), *û* zu *au* zum Distributionstyp A (s. Graphik 1). Die ältere Schreibung prägt das Schwäbische der Heidelberger Handschrift (HD (schw)), das Alemannische der Basler Handschrift (BSL (alm)) und das Bairische der Wolfenbütteler Handschrift (WBB (bai)). Laut *dtv-Sprachatlas* (s. Abb. 1) dürften das Schwäbische und das Bairische um die zweite Hälfte des 15. Jahrhunderts zur neueren Schreibung übergegangen sein. Das Alemannische hingegen trotz seiner Resistenz gegen die neuere Schreibung schließt diese aber – wenn auch recht gering – nicht gänzlich aus. Die neuere Schreibung findet sich im Ostschwäbischen der Münchener Handschrift (M (o-schw)) sowie im Fränkischen der Wolfenbütteler Handschrift (WBF (frk)), was den gezeichneten Ausbreitungsprozess im *dtv-Sprachatlas* bestätigt.

Auch bei *û/au* fällt im Schwäbischen und dem Bairischen die Resistenz gegen die neuere Schreibung auf, wobei das Ostschwäbische der Münchner Handschrift (M (o-schw)) – anders als bei *î/ei* – eine Dominanz der älteren Schreibung aufweist.

Bei *iu/eu* benutzt das Schwäbische der Heidelberger Handschrift (HD (schw)) konsistent die ältere Schreibung, das Schwäbische der Berliner Handschrift (B (schw)), das Ostschwäbische der Münchner Handschrift (M (o-schw)) und das Bairische der Wolfenbütteler Handschrift (WBB (bai)) hingegen überwiegend die neuere Schreibung. Der Stand ähnelt dem von *î/ei* und ist somit zum Distributionstyp B zu zählen.

Auf der graphematischen Ebene erweist sich das Alemannische – wie auch in der heutigen Mundart – resistent gegen die neuere Schreibung. Demgegenüber zeigen das Schwäbische, das Ostschwäbische und das Bairische je nach Graphemfolge Schwankungen. Festzustellen ist bei der Ausbreitung der bigraphischen Schreibungen der nhd. Diphthongierung eine ungleichmäßig Ausbreitung.

2.2 Lexikalische Ebene

Ausgehend von der Teilung der Lexeme in Semantika mit eigener lexikalischer Bedeutung und Funktionswörtern (Präpositionen, Possessivartikel und Personalpronomen), prägt sich bei den Funktionswörtern die Resistenz gegen die neuere Schreibung deutlicher aus als bei den Semantika. Die beiden gehören jedoch zum Distributionstyp C.

Die Zuordnung von Diakritika, ob diese eher zu der älteren Schreibung, also der vertikalen Bigraphie statt der horizontalen, zuzurechnen ist, oder zu der neueren, also lautlich nicht mehr signifikanter Schreibung, beeinflusst die Interpretation der Ausbreitung der neueren Schreibung. Die erste Option wirkt auf die neuere Schreibung hemmend, die zweite hingegen fördernd. In diesem Beitrag werden sie als vertikale Bigraphie zur älteren Schreibung gezählt, da das Diakritikon die mhd. Diphthonge und Monophthonge, aber nicht alle Buchstaben *u* betrifft. Bis auf das Fränkische der Wolfenbütteler Handschrift (WBF (frk)) erweist sich bei den Funktionswörtern die ältere Schreibung mit ihrem Anteil über die Hälfte hinaus als relativ resistent. Ebenso kommt sie auch bei dem in der neueren Schreibung konsistenten Mentelinbibeldruck (Mtln) zu einem Viertel vor. Als konsistent erweist sie sich im Schwäbischen der Heidelberger Handschrift (HD (schw)), gefolgt vom Bairischen der Wolfenbütteler Handschrift (WBB (bai)).

Die einzelnen Funktionswörter zeigen verschiedene Distributionen der älteren und der neueren Schreibung. So zählt die ältere Schreibung bei den Präpositionen mit deren verhältnismäßig hohen

Konsistenz zum Typ A, die bei den Possessivartikeln sowie dem Personalpronomen hingegen zum Typ B. Schwankungen in der Konsistenz sind vor allem im Schwäbischen festzustellen. So ist das Schwäbische der Heidelberger Handschrift (HD (schw)) relativ konsistent in der älteren Schreibung, das der Berliner Handschrift (B (schw)) bei Weitem weniger. Das Bairische (WBB (bai)) ist in der Konsistenz der älteren Schreibung je nach Lexem schwankend. So nimmt bei *iuch/euch* die neuere Schreibung Überhand. Das Ostschwäbisch (M (o-schw)) geht vollkommen zur neueren Schreibung über.

Bei den Semantika ist keine verlässliche Aussage zu machen, da die einzelnen Lexeme – anders als die Funktionswörter – nicht wiederholt vorkommen. Bei häufigeren Lexemen wie *g(e)lîch/gleich* und *wîb, wîblich/weib, weiblich* zählt die Distribution der älteren und der neueren Schreibung zum Typ B.

Von den Funktionswörtern zählen die Präpositionen mit größerer Häufigkeit die ältere Schreibungen zum Typ A, die Possessivartikel und das Personalpronomen *iuch/euch* hingegen zum Typ B. Diese verhalten sich ähnlich wie die Semantika, indem sich das Ost-schwäbische (M (o-schw)) konsequent der neueren Schreibung bedient. Im Schwäbischen der Berliner Handschrift (B (schw)) sowie im Bairischen (WBB (bai)) lässt die Konsistenz der älteren Schreibung dagegen nach.

Das Schwäbische der Heidelberger Handschrift (HD (schwa)) sowie das Alemannische (BSL (alm)) zeichnen sich bei den Präpositionen durch ihre konsequente ältere Schreibung aus, während das Bairische (WBB (bai)) je nach Lexem – egal ob Funktionswörter oder Semantika – in der Konsequenz schwankt. Die Konsistenz in der älteren Schreibung im Schwäbischen der Heidelberger Handschrift (HD (schw)) und die Inkonsistenz im Schwäbischen der Berliner Handschrift (B (schw)) – zwei Handschriften des gleichen Dialekts – legen die Vermutung nahe, dass die Entscheidung für die eine oder die andere Schreibung keinesfalls eine reine Angelegenheit der Sprachgeographie ist noch einen sprachimmanenten Wandel darstellt. Vielmehr kann sie mit soziokulturellen Faktoren verbunden sein, etwa mit der Sorgfalt der Anfertigung oder der Frage, ob die Handschrift gezielt einen für eine Bibel passenden Archaismus vermitteln soll.

2.3 Grammatische Ebene

Auf der grammatischen Ebene, also bezüglich der Ablautreihe (AR) I a und VI, verschwindet bis auf das Fränkische der Wolfenbütteler Handschrift (WBF (frk)) der dialektale Unterschied. Es herrscht die ältere Schreibung vor, wobei das Diakritikon *ü* in *geschüff* oder *giüt* als vertikale Bigraphie⁴, also als ältere

⁴ Die Wiedergabe des Diakritions als *u*-Umlaut sei als Notlösung verstanden. Die zwei Punkte über dem Buchstaben stellen keinen Umlaut im heutigen Deutsch dar.

Schreibung, aufgefasst wird. Hier werden das Verb *erschînen* der Ablautreihe I a⁵ sowie das Verb *schaffen* der Ablautreihe VI⁶ herangezogen. Tabelle 2 stellt die ältere und die neuere Konjugation vor und nach der nhd. Diphthongierung dar.

	Infinitiv	Präteritum	Präteritum	Partizip
		Singular	Plural	Präteritum
I a Mhd.	<i>erschînen</i>	<i>erschein</i>	<i>erschinen</i>	<i>erschinen</i>
Nhd.	<i>erscheinen</i>	<i>erschien</i>	<i>erschienen</i>	<i>erschienen</i>
VI Mhd.	<i>schaffen</i>	<i>schuof</i>	<i>schuofen</i>	<i>geschaffen</i>
Nhd.	<i>schaffen</i>	<i>schuf</i>	<i>schufen</i>	<i>geschaffen</i>

Tabelle 2: Temporale Konjugation

Entscheidend für die Erkennung der Ablautreihe als mhd. oder nhd. ist das Präteritum Singular, ob hier das präteritale Stammvokal mit *ei* geschrieben wird (Mittelhochdeutsch) oder mit *i* (Neuhochdeutsch), da sich beim Buchstaben *i* allein graphematisch nicht erkennen lässt, ob es sich um einen Kurzvokal handelt oder um ein Langvokal⁷. Das Vorkommen des präteritalen Stammvokals als *ei* wie bei *erschein* zeugt daher von der älteren mhd. Ablautreihe, hingegen das als *i* wie bei *erschin* von der neueren nhd., dem Langvokal.

Interessant ist die ältere Schreibung im Fränkischen der Wolfenbütteler Handschrift (WBF (frk)), die sonst eine hohe Konsistenz in der neueren Schreibung hat. Bei der Ablautreihe VI hängt die Entscheidung für die ältere mhd. Ablautreihe oder die neuere nhd. von der Interpretation des Diakritikons ab. Sieht man in diesem die Spur der älteren Bigraphie, also wie hier einen Wandel von der horizontalen zur vertikalen Bigraphie, handelt es sich um den älteren Stand. Der Befund legte die Interpretation nahe, im Diakritikon die Spur der älteren Schreibung zu sehen. Dies lässt sich damit begründen, dass alle Handschriften bis auf das Fränkische (WBF (frk)), das sich sonst durch eine konsequente neuere Schreibung auszeichnet und auch hier konsequent *u* ohne Diakritikon anwendet, der älteren Schreibung und des Diakritikons bedienen. Der ältere Stand der Schreibung in der Ablautreihe erweist sich als ziemlich konsistent, womit es sich um den Distributionstyp C handelt.

5 Hugo Moser/Igeborg Schröbler/Siegfried Grosse (221982): Mittelhochdeutsche Grammatik. Tübingen: Max Niemeyer (= Sammlung kurzer Grammatiken germanischer Dialekte: A, Hauptreihe; 2), § 158; Ebert/Reichmann/Solms/Wegera (1993), § M 109.

6 Moser/Schröbler/Grosse (221982), § 163; Ebert/Reichmann/Solms/Wegera (1993), § M 131.

7 Ebert/Reichmann/Solms/Wegera (1993), § L 21.

3. Fazit

Rein auf Sichtbares konzentriert, also auf das sichtbare Schriftbild auf dem Papier, unterscheidet sich die Schreibung von dem einen Dialekt zum anderen deutlich voneinander, indem die höchste Konsistenz in der älteren Schreibung das Alemannische (BSL (alm)) aufweist und die in der neueren das Fränkische (WBF (frk)). Lexikalisch differenziert findet die neuere Schreibung bei den Semantika mehr Anwendung. Bei den Funktionswörtern Possessivartikeln und dem Personalpronomen hingegen überwiegt die neuere Schreibung, bei den Präpositionen dagegen die ältere. Sehr wenig von dem sichtbaren Wandel involviert sind die kritischen Vokale in den Ablautreihen I a und VI, da sie bis auf das Fränkische (WBF (frk)) in der älteren Schreibung eine recht hohe Konsistenz zeigen. In der „vor-Thesis-Zeit“ können die älteren Schreibungen durchaus in die neueren übergehen. Dieser Prozess geht im Bereich des unmittelbar Sichtbaren vor. Die differenzierten Sprachebenen liefern dem Wandlungsprozess ein detailliertes Bild. Die Semantika und Possessivartikel sowie Personalpronomen begünstigen wohl stärker die neuere Schreibung (Typ B), von den Funktionswörtern wirken die Präpositionen für die neuere Schreibung hemmend (Typ A). Am konservativsten in der Schreibung sind die Formen, die einem paradigmatischen Wechsel im grammatischen System unterworfen nicht immer sichtbar sind (Typ C). Hier werden die älteren Formen resistent beibehalten. Zeugnis dafür sind noch heute die älteren Formen des Konjunktivs II wie *hülfe* und *stiünde*, die auf den Vokal vom Präteritum Plural in der alten Ablautreihe zurückgehen.

19世紀初頭ウィーンにおける言語規範と言語使用

——ベートーヴェンの筆談帳におけるリテラシーの違いに注目して——¹

佐藤 恵

1. 筆談帳——多様な書き手によるドイツ語資料

ベートーヴェン (Ludwig van Beethoven: 1770-1827) がハイドンに弟子入りするためにウィーンに移り住んだのは、22歳の 1792 年であった (Loesch/Raab 2008: 881)。このバイエルン・オーストリア方言圏では、神聖ローマ帝国官房の伝統を汲む東上部のドイツ語文章語が長く力を持ち、ライプツィヒとドレスデンを中核とする東中部型の標準的なドイツ語文章語が入るのが最も遅れた。しかし、マリア・テレジア (在位 1740 ~ 1780) による国家の近代化に向けた改革の結果、ベートーヴェンが移り住んだ頃のオーストリアでは標準的ドイツ語文章語がすでにかなり浸透していた。マリア・テレジアは 1749 年に、東中部ドイツ語型の文章語を規範とする文法書 *Grundlegung einer deutschen Sprachkunst* を前年に出したゴットシェート (Johann Christoph Gottsched: 1700-1766) をシェーンブルン宮殿に招き、この啓蒙主義の代表的な文藝理論家でもあったゴットシェートに、「オーストリアの言語のひどさを詫びた」 (Polenz 2013: 185) という。マリア・テレジア自らが設立した官僚養成機関であるテレジア・アカデミー (テレジアーヌム) ではその翌年にすでにゴットシェートの文法書が教科書として導入され、標準的な文章語を正しく読み書きできる能力がオーストリアの官僚や教養層に求められた。マリア・テレジアはさらに 1774 年には大きな学校改革を行い、東中部ドイツ語型の標準的な文章語を学校で一貫して教える教育方針を明確に採った。この方針はヨーゼフ 2 世 (在位 1765 ~ 1790) にも引き継がれ、またクロップシュトック、レッシング、ゲーテといった作家たちが東中部ドイツ語型の標準的ドイツ語を用いたことも影響して、標準的ドイツ語文章語は世紀の変わり目頃にはバイエルン・オーストリア方言圏で広く浸透していた (Polenz 2013: 185-186, Riecke 2016: 180-181, Ernst 2021: 190-191, 鯨岡 2019: 69-71)。

晩年に聴覚を失ったベートーヴェンは、筆談帳を用いて会話をした。今日に伝承されているのは、1818 年 2 月 26 日から 1827 年 3 月 6 日までの筆談記録である。この筆談帳は、さながら

¹ 本論文は、科学研究費補助金（課題番号：JP21K12987、研究課題「ベートーヴェンの『筆談帳』におけるドイツ語に関する歴史語用論的研究」）による研究成果の一部である。ここに記し、謝意を表する。

王政復古期のウィーンにおける日常の言語生活が総覧できる言語資料となっている。買い物や料理の指示にはじまり、宮廷のゴシップ、ベートーヴェン自身の身辺事情、音楽会や作品の売却や受容に関わる事柄、ナポレオンやウィーン会議後の復古体制に関わる時事・政治問題など多彩な話題について、家政婦、主婦、写譜職人、音楽家、教育者、作家、医師、新聞記者、廷臣等々、社会階層も教育程度も異なる多種多様な人々が、言い換えれば、読むのはできるが書くのはおぼつかない人物から大学教育を受けたリテラシーの高い人物が、このベートーヴェンの筆談帳にそれぞれ自らの書き方でドイツ語を綴っている。本論文はリテラシーの違いに注目し、筆談帳に書き込まれたドイツ語の文字データ（約60万語）を分析して19世紀初頭のウィーンで実際に行われた言語的営みの一局面を明らかにしようとする研究に向けたパイロット調査である。

筆談帳に（ベートーヴェン本人を除いて）最も頻繁に登場するのは、甥のカール（Karl van Beethoven: 1806-1858）である。ベートーヴェンの生涯に影を落とす親権裁判の当事者として有名なこのカールについては、彼の教育に異様な熱意を注いだベートーヴェンのおかげで学校や教師も含めその教育歴を仔細に辿ることができる。カールはウィーンに生まれ、1816年から1823年まで複数の寄宿制私立学校で教育を受けた後ウィーン大学に進学し、さらに1825年には工芸学校（後のウィーン工科大学）で学んだことがわかっている（Wolf 1995: 272-286）。カールは筆談帳の最初期である1818年には12歳で初等教育段階にあり、筆談帳の最後の1827年には21歳と、筆談帳が使用された期間がカールの就学期間を完全にカバーしている。マリア・テレジアとヨーゼフ2世による教育制度の整備と国語教育改革の推進が実を挙げた1810～20年代のウィーンで学校教育を受けたカールは、王政復古期を通じて維持された国語教育政策の生き証人的な存在であり、東中部型標準ドイツ語の規範化を強く推進する政策が学校教育を通じてどのように実現されていたかを観察できる格好の事例と言える。カールの場合、カール自身の書き込みだけでなく、伯父ベートーヴェンの秘書として行った書簡の代筆での書き込みも多く存在し、約15万語からなるカールの書き込みが筆談帳に残っている。

以下、カールが通った学校の国語教科書の分析を通じ、当時の学校教育の教科書や教授法によって媒介された言語規範（テシス）が実際の言語使用（ノモス）にどのように、またどの程度反映されていたのかを確認し、言語規範と言語使用の実態の解明を試みる。

2. 一般学校教育令（1774年）による学校教育改革と言語教育政策

その前にまずは、1774年の「一般学校教育令」（Allgemeine Schulordnung）による学校教育

19世紀初頭ウィーンにおける言語規範と言語使用

改革と言語教育政策を概観しておきたい。一般学校教育法が公布される1774年以前は、社会の上層のみが十全な教育を享受し、教会、修道院付属校が唯一の教育組織であった。教育には費用がかかるため、農村部の子供および都市部下層の子供の大半は教育が受けられず文盲状態であり、教会の用具係 (Mesner) が教員を兼務しているという状況であった。当時は同じ教室で年齢・進度が異なる子供がそれぞれ個別に学習し、教育内容は教理問答が中心であった。母語教育の教科書としてアンテスペルク (Johann Balthasar Antesperg: 1682-1765) の *Das Josephinische Erzherzögliche A.B.C. oder Namenbüchlein* (1744) が挙げられる。表題にあるように、これはヨーゼフ2世に捧げられた読み書き入門の本で (Engelbrecht 1984: 456)、印刷字体だけではなく筆記体の読み方と簡単な算数だけを教えるものだった。

マリア・テレジアは1740年10月、父カール6世の死去に伴い、オーストリア（ハプスブルク世襲領）の君主となった。国力増強には国民の教育が必須であり、また多民族国家オーストリアにおいては共通言語としてのドイツ語の整備が必要であると考えたマリア・テレジアは1760年、宮廷教育委員会 (Studienhofkommission) の設置により教育改革をスタートさせた。マリア・テレジアは義務教育の導入と教科書出版社の設立を検討し、さらには1770年10月に学校教育をカトリック教会から分離して、世俗権力の管理下に置くことを決意した (*Sammlung aller k.k. Verordnungen und Gesetze aus dem Jahre 1740 bis 1780*, Bd. 8, Wien 1786: 293-294)。1774年にマリア・テレジアによって公布された初等教育に関する「一般学校教育法」によって、初等学校 (Trivialschule)、基幹学校 (Hauptschule)、師範学校 (Normalschule) の三種類の義務教育校が設置された。初等学校 (Trivialschule) とは初等・中等学校として「読み・書き・計算」の三科目を学ぶ学校であり、すべての町村に設置された。基幹学校 (Hauptschule) は3-4学年制で中都市に1校設置され、一部教員養成機能も有していた。師範学校は大都市に1校設置された1-2学年制の教員養成機能を持つ学校であり、他の義務教育校の規範となった (Engelbrecht 1984: 103)。

1774年1月にマリア・テレジアはプロイセン王フリードリヒ2世の許可を得て、プロイセン領シュレージエンの教育改革を行ったフェルビガー (Johann Ignaz von Felbiger: 1723-1788) をウィーンに招聘する。マリア・テレジアの委託を受けてフェルビガーが練った教育改革案「一般学校教育令」では、1) 6歳から12歳の6年間は一般義務教育を受けることとする、2) 教育を無償化し、貧しい家庭の子供に教科書を無料で配布する、3) 監督組織として大都市に学校教育委員会を設置する、4) 同年齢の男女混合クラスで、全員が同時に同じ作業をする集団教育を行うことが定められた (Engelbrecht 1984: 105)。1774年以前は同じ教室にさまざまな年齢の生徒が並び、それぞれに違う学習をしていた個別教育であったのが、1774年以後は同質集団に対す

る均一教育を行う集団教育に変わったことは、言語規範の普遍化と大きく関わる点であろう。

「一般学校教育令」発布後の最初の教科書は、フェルビガーが執筆した (*ABC- oder Namenbüchlein, Lesebuch für die Schuler in den deutschen Schulen in den k.k. Staaten*)。フェルビガーは学校制度、教員養成、授業科目、カリキュラムを決めただけでなく、教科書も執筆して統一教科書として定め、自身の教科書以外は回収するという徹底ぶりであった。初等教育におけるドイツ語教育は、*Deutsche Sprachlehre* (教師用の文法書)、*Methodenbuch* (学習指導書)、*ABC oder Namenbüchlein* (生徒用の初級読本)、*Anleitung zum Schönschreiben* (習字指導要綱)、*Vorschriften zum Gebrauche der deutschen Schulen* (生徒用の習字手本) によって、オーストリア国内どこでも同じようになされるよう厳格に定められていた。ヨーゼフ2世、フランツ2世 (在位 1792 ~ 1806) 治下で改革はあったものの、基本的な枠組みは 1848 年まで変わらなかった。

以上のように、法令によって学校制度が整備され、国家が教師の育成および任命の主体となった。子供を労働のために学校に通わせない親には罰則を科すことで、一般義務教育を徹底させた。多民族国家オーストリア全土で均一な教育を浸透させるために、統一教科書、統一した教授法が定められ、同一年齢の子供を集めて集団教育が行われた。また、どの子供も同じ教育が受けられるように、同一期間に同一授業時間数が定められた。² このようにして、マリア・テレジアの教育改革にともない、ドイツ語の規範化が推進された。

3. 威カールの教育歴

19世紀は、18世紀半ば以降にドイツ語圏各国で導入された一般就学義務がようやく実を挙げ、広範に普及するに至った時代である。1806年生まれのベートーヴェンの甥カールは、すでに述べたようにマリア・テレジアの言語政策以後のウィーンで筆談帳使用期間 (1818 ~ 1827 年 : 12 歳 ~ 21 歳) に母語教育、大学進学コースの教育を受けた。具体的にはまず 1816 年 9 月まで、カールはウィーンの師範基幹学校 (Normal-Hauptschule) に通った。これは、ウィーン市内に師範学校の第 1 号として設置されたものであり、マリア・テレジアとフェルビガーのお膝元の学校と言える。オーストリア領内のすべての基幹学校、初等学校の模範とされた。そのあとカールは 1816 年から 1818 年までジャンナタシオ (Giannatasio del Rio, Cajetan: 1764-1828) の寄宿制学校、1819 年から 1823 年まではブレヒリンガー (Blöchliger von Bannholz, Joseph: 1788-1855) の寄宿制学校に通い、その後はウィーン大学、工芸学校で学んでいた。カールが 9 歳の時 (1816

² 師範学校におけるドイツ語入門教育の科目は次のような構成となっていた。文字の習得 (Buchstabenkennen)・綴りと読み (Buchstabieren) 週 11 時間、読本 (Lesen) 週 11 時間、筆記 (Schreiben) 週 16 時間、正書法 (Rechtschreibung) 週 6 時間、ドイツ文法 (Deutsche Sprachlehre)・書簡作法 (Briefstil) または作文練習 (Übung in schriftlichen Aufsätzen) 週 5 時間 (Engelbrecht 1984: 425)。

19世紀初頭ウィーンにおける言語規範と言語使用

年4月で第3学年1学期・2学期分)の成績表がボンのベートーヴェン・ハウスに残されており、師範基幹学校の第3学年でどのような教科を学んでいたかを窺い知ることができる。

- 教理問答：良
- 宗教：優
- 道徳・福音書：良
- 読本第2部：優
- 読解(印刷されたドイツ語、筆記されたドイツ語、印刷されたラテン語、筆記されたラテン語)：優
- 分数：---、のべ算：良
- 習字(ドイツ語筆記体：優、ドイツ語官序体：---、ラテン文字：良)
- 書き取りと正書法・ドイツ文法・発音：優
- 作文法：---
- ラテン語の読み方・書き取り：---³

上記の通信簿とは別に、甥カールが10歳(1816年9月7日)の時の成績表⁴を見ても、カールは師範基幹学校において全般的に優秀な成績を収めていたことがわかる。

4. 異形(**Variante**)の選択——言語規範と言語使用

4.1 **ging** vs. **gieng**, **Brot** vs. **Brodt**

1794年に出版された教師用の学習指導書(*Deutsche Sprachlehre zum Gebrauche der deutschen Normal- und Hauptschulen in den k.k. Staaten*. Wien. 1794: 219)の正書法の章には、次のように書かれている。

Erster Grundsatz. Man schreibe die deutschen Wörter, so wie man sie, der allgemeinen besten Aussprache gemäß, ausspricht. [...] Demnach schreibt man: *ging*, *Amt*, *Brot*, *Dampf*; nicht: *gieng*, *Ambt*, *Brodt*, *Damf*.

³ Karl van Beethoven (Neffe), Schulzeugnis der 3. Klasse der k.k. Normal-Hauptschule vom April 1816: BEETHOVEN HAUS BONN <https://www.beethoven.de/de/archive> (最終閲覧日: 2025年4月28日)

⁴ Karl van Beethoven (Neffe), Schulzeugnis der 3. Klasse der k.k. Normal-Hauptschule vom 7. September 1816: BEETHOVEN HAUS BONN <https://www.beethoven.de/de/archive6> (最終閲覧日: 2025年4月28日)

原則その1. ドイツ語は広く行われている、最良の発音に従って話すように書くべし。 [...] これに倣うならば、*ging*, *Amt*, *Brot*, *Dampf*と書くべきであって、*gieng*, *Ambt*, *Brodt*, *Damf*としてはならない。

書き手	ging	gieng	計
Karl van Beethoven (Neffe: 1806-1858)	100% (111)	0	111
Gerhard von Breuning (1813-1892)	100% (2)	0	2
Carl Joseph Bernard (1780-1850)	100% (1)	0	1
Joseph Blöchligner (1788-1855)	100% (1)	0	1
Karl Holz (1799-1858)	95.35% (41)	4.65% (2)	43
Anton Felix Schindler (1795-1864)	92.31% (48)	7.69% (4)	52
Ignaz Schuppanzigh (1776-1830)	33.33% (1)	66.67% (2)	3
Ludwig van Beethoven	33.33% (1)	66.67% (2)	3
Johann van Beethoven (Bruder: 1776-1848)	25% (2)	75% (6)	8
Franz Oliva (1786-1848)	0	100% (14)	14
Joseph Czerny (1785-1831)	0	100% (3)	3
Johann Baptist Bach (1779-1847)	0	100% (2)	2
その他 (Köferle, Moscheles, Lamatsch, Kuffner, Mathias Schlemmer)	100% (7)	0	7
その他 (Verwalter, Peters, Drechsler, Piringer)	0	100% (5)	5
計	84.31% (215)	15.69% (40)	255

表1 筆談帳における *ging/gieng* の用例数（書き込み者別）

ゴットシェートのあとを継いで、東中部型の標準的ドイツ語を規範とする文法書と辞書を著したのはアーデルング (Johann Christoph Adelung: 1732-1806) である。彼の著作はオーストリアでも出版され、広く用いられた。この学習指導書に示された正書法上の規範は、このアーデルングの4巻からなる辞書 (Adelung 1793/1796/1798/1801) と合致している。第2巻 (1796: 493) に *ging* が、第1巻 (1793: 251) に *Amt* が、第1巻 (1793: 1205) に *Brot* が、第1巻 (1793: 1380) に *Dampf* が

19世紀初頭ウィーンにおける言語規範と言語使用

それぞれ見出し語として示されている。また、ウィーンで出版されたアーデルングの辞書の簡略版である Adelung (1795) には *Brot* の項目に「発音すると t の音が聞こえるので、*Brod* ではなく *Brot* である」 (Adelung 1795: 59) と書かれている。カールが 13 歳のときに同じくウィーンで出版されたアーデルングの辞書の簡略版 (Adelung 1819) も同様で、「とりわけ長く発音すると t の音が聞こえるので *Brod* もしくは *Brodt* ではない」 (Adelung 1819: 42) とある。

筆談帳のなかでさまざまな書き手はそれぞれの言語使用において、この言語規則ないし言語規範に従った実践しているのであろうか。まず、*ging* と *gieng*、*Brot* と *Brodt* についてどちらの異形が使用されているか調査する。*ging/gieng* の場合、以下の通りである（括弧内の数字は用例数）。

ging vs. *gieng*

ging: Neffe Karl⁵ (111), Schindler⁶ (48), Holz⁷ (41), Johann van Beethoven⁸ (2), Gerhard von Breuning⁹ (2), Köferle (2), Moscheles¹⁰ (2), Beethoven¹¹ (1), Bernard¹² (1), Blöchliger¹³ (1), Schuppanzigh¹⁴ (1), Lamatsch (1), Kuffner¹⁵ (1), Mathias Schlemmer¹⁶ (1)

gieng: Oliva¹⁷ (14), Johann van Beethoven (6), Schinder (4), Joseph Czerny¹⁸ (3), Beethoven (2), Holz

5 Beethoven, Karl (Franz) van (1806 Wien-1858 Wien)。ベートーヴェンの甥。

6 Schindler, Anton Felix (1795 Meedl bei Neustadt/Mähren-1864 Bockenheim bei Frankfurt a.M.)。ヴァイオリン奏者でベートーヴェンの無給秘書（クーパー 1997: 295）。

7 Holz, Karl (1799 Wien-1858 Wien)。ニーダーエーステライヒ議会事務局の官吏でヴァイオリン奏者、シュパンツィヒ弦楽四重奏団の一員（同上 305）。

8 Beethoven, Nikolaus Johann van (1776 Bonn-1848 Wien)。ベートーヴェンの次弟。兄ベートーヴェンを頼って 1795 年 12 月にウィーンに移り住み、1808 年まで薬剤師の助手を務めた。同年、自分で薬局を経営するためリンツへ移る（同上 303）。

9 Breuning, Gerhard von (1813 Wien-1892 Wien)。ベートーヴェンのボン時代からの友人 Stephan von Breuning の長男、医師 (BKH, Bd.11 286)。

10 Moscheles, Ignaz (1794 Prag-1870 Leipzig)。プラハ出身の作曲でピアノ奏者。1808 年にウィーンに居を定める（同上 306）。

11 Beethoven, Ludwig van (1770 Bonn-1827 Wien)。

12 Bernard, Carl Joseph (Joseph Karl) (1780-1850)。著述家、台本作家。1800 年にウィーンに移住し、1819 年（ウィーン新聞）の編集者となる（同上 304）。

13 Blöchliger von Bannholz, Joseph (1788-1855)。スイス出身。1814 年、ウィーンに寄宿制学校を開設し、ベートーヴェンの甥カールが 1819 年から 1823 年まで在籍（同上 301）。

14 Schuppanzigh, Ignaz (1776 Wien-1830 Wien)。ウィーンのヴァイオリン奏者（同上 294）。

15 Kuffner, Christoph (1780 Wien-1846 Wien)。ウィーンの作家（同上 289）。

16 Schlemmer, Matthias (geb. 1783)。ウィーンの官吏（同上 295）。

17 Oliva, Franz (1786-1848)。銀行員。無給秘書のような役割を果たす（同上 288）。

18 Czerny, Joseph (1785 Horwitz bei Melnik/Böhmen-1831 Wien)。ウィーンのピアノ奏者、作曲家。ベートーヴェンの甥カールのピアノ教師をしていた（同上 296）。

この調査結果を図表化したものが、表1である。

カールに注目すると、カールは111例すべてで一貫して、教科書で指定されている *ging* という形で書いている。また、カールと唯一歳が近い（カールより7歳年下のウィーン生まれの）ゲルハルト・フォン・ブロイニング（Gerhard von Breuning: 1813-1892）は、2度とも *ging* という「正しい」形を使用している。それに対して無給秘書のような役割であったオリーヴァ（Franz Oliva: 1786-1848）は14例すべてにおいて *gieng* と綴っている。同じく秘書のような仕事をしていたシンドラーやホルツ、ベートーヴェンの弟ヨハンの書き込みには、*ging*、*gieng* の用例が共に確認できる。

アーデルングの辞書を見ると、*ging/gieng* という異形選択が、単に正書法の問題ではなく、母音を短母音で〔イ〕と発音するか、それとも上部ドイツ式に2重母音で〔イエ〕と発音するかという問題でもあったことがわかる。

Im Imperfecto schreibt man es gemeinlich *gieng*, welches ein Überbleibsel einer gedehnten Oberdeutschen Mundart ist, welche *gieng* in zwey Sylben spricht, bey dem Kero keanc, bey dem Ottfried *giang*. Allein da man im Hochdeutschen nur ein geschärfstes i hören lässt, so schreibt man es richtiger *ging*, so wie auch in *gibst*, *gibt*, *fing*, *hing*, das ie überflüssig, ja der Hochdeutschen Aussprache nach unrichtig ist. (Adelung Band 2 1793: Sp. 499-500)

過去形では一般には *gieng* と書かれる。これは、*gieng* を二音節で長く発音する上部ドイツの方言の名残であり、ケーロ〔古高ドイツ語期のザンクトガレンの僧侶：筆者注〕では *keanc*、オットフリート〔古高ドイツ語期のヴァイセンブルクの僧侶：筆者注〕では *giang* である。しかし、標準ドイツ語では鋭い *i* の音しか発音されないので、*gibt*、 *fing*、*hing* の場合に *ie* は余剰であり標準ドイツ語の発音では正しくないのと同様に、*ging* と書くのが正しい。

次に、*Brod/Brodt* の調査からは次のような結果が得られる（括弧内は使用の実数）。

19 Bach, Johann Baptist (1779-1847)。法律家。1816年以降ベートーヴェンの法律顧問を務めた。特に1819年から1820年にかけて、甥カールに関する後見人問題の裁判で助言者となる（同上299）。

20 Peters, Karl。宮廷顧問官。ベートーヴェンのパトロンであるロブコヴィッツ家の子供たちの家庭教師（同上303）。

21 Drechsler, Joseph (1782-1852)。作曲家、甥カールが在籍したウィーン規範校の和声学教授（BKH Bd. 2: 436）。

22 Piringer, Ferdinand (1780-1829)。ウィーンの官吏、ヴァイオリン奏者（クーパー 1997: 299）。

19世紀初頭ウィーンにおける言語規範と言語使用

Brot vs. *Brodt*

Brot: Neffe Karl (20), Holz (3), Beethoven (1), Johann van Beethoven (1)

Brodt: Beethoven (1), Johann van Beethoven (1)

この調査結果を図表化したものが、次の表2である。

書き手	Brot	Brodt	計
Karl van Beethoven (Neffe: 1806-1858)	100% (20)	0	20
Karl Holz (1799-1858)	100% (3)	0	3
Ludwig van Beethoven	50% (1)	50% (1)	2
Johann van Beethoven (Bruder: 1776-1848)	50% (1)	50% (1)	2
計	92.59% (25)	7.41% (2)	27

表2 筆談帳における *Brot/Brodt* の用例数 (書き手別)

このように、カールは20例において一貫して *Brot* と綴っている。1つ例を挙げておく。

NEFFE: So gutes Brot gibts in Wien gar nicht. (Ludwig van Beethovens Konversationshefte [BKH] Bd.4: 77. Heft 40, 4r) 「こんなにおいしいパンは、ウィーンにはありません。」

それに対してベートーヴェンは、„braune Soß geröstet brodt“ (BKH Bd.9: 226. Heft 110, 1ar) のような *Brodt* という形 (1例) と正規の形 *Brot* (1例) の両方を使用している。

以上のように、カールは *ging* と *Brot* 共に、教科書が指定した通りの綴りで書いていることがわかる。

4.2 *Lection* vs. *Lekzion*, *Classe* vs. *Klasse*, *practisch* vs. *praktisch*

前節で引用した教師用の学習指導書には、外来語の綴りについても指定されている。

Fremde Nahmen und Wörter müssen, wenn sie nicht schon das deutsche Bürgerrecht erhalten haben,

mit deutschen Buchstaben, aber nach Art ihrer Sprache, d. i. mit eben den Buchstaben, welche sie in der fremden Sprache haben, geschrieben werden. [...] Das c und ti müssen in den Wörtern bleiben, welche aus dem Lateinischen herkommen, und noch nicht allgemein das deutsche Bürgerrecht erhalten haben: *Lection*, *Classe*, *practisch*; nicht: *Lekzion*, *Klasse*, *praktisch*. (*Deutsche Sprachlehre zum Gebrauche der deutschen Normal- und Hauptschulen in den k.k. Staaten*. Wien. 1794: 220-221) 外来の名称や単語は、ドイツの市民権を得ていない場合にはドイツ語の文字を使用するときも、当該の〔元の〕言語の流儀にしたがって、すなわちその外国語で書かれるときの文字使い通りに書くものとする。 [...] ラテン語に由来し、まだ一般にドイツの市民権がない語の場合は、c と ti はそのままとする。すなわち、*Lection*、*Classe*、*practisch* とし、*Lekzion*、*Klasse*、*praktisch* とはしない。

アーデルング全4巻の辞書でも見出し語として *Lection* (Adelung 1796: 1964)、*Classe* (Adelung 1793: 1338)、*practisch* (Adelung 1798: 821) が挙げられている。

上記の3語について同じく筆談帳での調査からは次のような結果が得られる。

Lection vs. *Lekzion*

Lection: Neffe Karl (15), Schindler (5), Holz (4), Johann van Beethoven (1), Joseph Czerny (1), Neberich (1), Unbekannter (1)

Lekzion: Schuppanzigh (1), Breuning (1), Stephan von Breuning (1)

*Lection/Lekzion*について、カールは15例すべてにおいて一貫して、学習指導書に指定されたのと同じcを綴っている。

NEFFE: Von früh 8 bis Abends 8 gibt er Lection (BKH Bd.5: 159. Heft 56, 20v)

「朝の8時から夜の8時まで、彼はレッスンをしています。」

*Lekzion*と書いているのは、ウィーン生まれのヴァイオリニストシュパンツィヒ (Schuppanzigh, Ignaz: 1776-1830) と、ベートーヴェンのボン時代の友人ブロイニングである。

SCHUPPANZIGH: Sie lauft in ihren alten Tagen herum und giebt Lekzionen (BKH Bd. 8: 133. Heft 96, 15r)

19世紀初頭ウィーンにおける言語規範と言語使用

書き手	Lection	Lekzion	計
Karl van Beethoven (Neffe: 1806-1858)	100% (15)	0	15
Anton Felix Schindler (1795-1864)	100% (5)	0	5
Karl Holz (1799-1858)	100% (4)	0	4
Johann van Beethoven (Bruder: 1776-1848)	100% (1)	0	1
Joseph Czerny (1785-1831)	100% (1)	0	1
その他(Neberich, Unbekannter)	100% (2)	0	2
Stephan von Breuning (1774-1827)	0	100% (2)	2
Ignaz Schuppanzigh (1776-1830)	0	100% (1)	1
計	90.32% (28)	9.68% (3)	31

表3 筆談帳における *Lection/Lektzion* の用例数 (書き手別)
「彼女も昔は走り回ってレッスンをかけもちしてましたよ」

次に *Classe/Klasse* は以下の通りである。

Classe vs. *Klasse*

Classe: Neffe Karl (17), Blöchliger (6), Holz (5), Bernard (1), Schindler (1)

Klasse: Beethoven (3), Bernard (2), Schindler (2), Holz (2), Peters (1), Oliva (1)

この場合もカールはすべての事例で、学習指導書の指定に合致した c を綴っている。例えば 1823 年、17 歳の時に次のような書き込みを残している。

NEFFE: Die Gymnasialschulen werden [in] 2 Classen getheilt, in die untern, und obern. Die untern sind die 4 Grammatical-Classen, die Obern die 2 Humanitäts-Classen. (BKH Bd.3: 390. Heft 36, 19r)
「ギムナジウムは 2 部に、つまり下級と上級に分かれています、下級が 4 年制の文法課程、上級が 2 年制の人文課程となっています。」²³

23 カールのこの説明通りだとすると、初等教育：6 年制 (Normal-, Haupt- und Trivialschule)、中等教育：6 年制

一方、ウィーン新聞の編集者であるベルナルト（1780年生まれ）、秘書シンドラーの書き込み

書き手	Classe	Klasse	計
Karl van Beethoven (Neffe: 1806-1858)	100% (17)	0	17
Joseph Blöchliger (1788-1855)	100% (6)	0	6
Karl Holz (1799-1858)	71.43% (5)	28.57% (2)	7
Carl Joseph Bernard (1780-1850)	33.33% (1)	66.67% (2)	3
Anton Felix Schindler (1795-1864)	33.33% (1)	66.67% (2)	3
Ludwig van Beethoven	0	100% (3)	3
Peters	0	100% (1)	1
Franz Oliva (1786-1848)	0	100% (1)	1
計	73.17% (30)	26.83% (11)	41

表4 筆談帳における *Classe/Klasse* の用例数（書き手別）

には *Classe*、*Klasse* 両方の綴りが確認できる。

最後に *practisch/praktisch* の例を挙げる。

practisch vs. *praktisch*

practisch: Neffe (2), Holz (1)

praktisch: Bernard (4), Schindler (2), Bach (1)

2例のみしか使用例がないが、カールはここでも2度とも *c* と綴っている。

NEFFE: Theoretisch ist sie nicht zu zwingen; nur durch praktische Applicirung gewisser unschädlicher Hausmittel. (BKH Bd.10: 278. Heft 124, 20r)

「理屈での人に言うことを聞かせるのは無理です。なにか無害な家庭薬を実際に投与する

よりほかありません」

一方、ジャーナリストのベルナルトは一貫して *k* と綴っている。

BERNARD: Die praktische Erziehung ist immer außerordentlich überwiegend. (BKH Bd.1: 394. Heft 10, 54r)

書き手	practisch	praktisch	計
Karl van Beethoven (Neffe: 1806-1858)	100% (2)	0	2
Karl Holz (1799-1858)	100% (1)	0	1
Carl Joseph Bernard (1780-1850)	0	100% (4)	4
Anton Felix Schindler (1795-1864)	0	100% (2)	2
Johann Baptist Bach (1779-1847)	0	100% (1)	1
計	30% (3)	70% (7)	10

表5 筆談帳における *practisch/praktisch* の用例数 (書き手別)

「実践的な教育が常にきわめて重要なのです。」

以上から、今回の調査項目 (*ging* vs. *gieng*, *Brot* vs. *Brodt*, *Lection* vs. *Lekzion*, *Classe* vs. *Klasse*, *practisch* vs. *praktisch*) に関する限りではあるが、カールは教師用の学習指導書で「正しい」とされ、アーデルングの辞書でも見出し語に立てられている綴り方 (規範) に合致した言語使用を一貫していることが確認できる。

5. 対極の「限界リテラシー」

ベートーヴェンの筆談帳には、カールのように官製の言語規範に合致した言語実践を一貫させているように見える事例が見られる一方で、「限界リテラシー」の事例も明らかに確認できる。「限界リテラシー」とは、「よほどのことがない限りみずから書くことはせず、周囲に書字に巧みな者がいれば頼ってしまう」(大黒 2019: 95-96) のだが、「書かざるをえない立場に追い込」(大黒 2019: 97) まれて書くと、「文法や書字の規則を無視した自由奔放な」(大黒 2019: 98) ことばであることが露呈するような読み書き能力のことである。「書く機会の少なさ、書字教育の不

足ないし欠如、見よう見まねの独学による書字習得」（大黒 2019: 94）しかできなかった人物たちの読み書き能力のことである。

そのような限界リテラシーが現れているのが、家政婦バーバラ・ホルツマン（Barbara Holzmann: 1755-1831）のドイツ語である。ホルツマンは、教育の程度という社会的属性の点でカールと対照的であると想定される。彼女は1755年生まれで、ベートーヴェン宅で家政婦として働き始めたのは67歳のときであった。マリア・テレジアによる言語政策的転換および義務教育の普及以前に幼少期を過ごしていたことになる。²⁴ 大黒によれば「限界リテラシーは存在しても普段は隠れていて見えにく」（大黒 2019: 96）いが、聴覚に問題を抱えるベートヴェンと意思疎通するには筆談するほかないという状況に追いやられて、ホルツマンは自ら書くことをしたのであろう。筆談帳におけるホルツマンの書き込みをみると、方言の音声がそのまま文字化されたように綴られている。

HOLZMANN: Der her ist Nicht zu haus Erkumt in einer stunt das köhnen Miett im spröch (BKH Bd.6: .Heft 73, 6r)

「あの方は家にいませんでしたが、一時間後にいらっしゃいます。それはだんな様と彼とで話してください。」

上記の書き込みを標準的なドイツ語に直すと *Der Herr ist nicht zu Haus. Er kommt in einer Stunde.* Das können [Sie] mit ihm sprechen. である。*Erkumt* (Er kommt) のように別個の単語 *er* と *kommt* という単語ごとに分かち書きをせざ一綴りに書いているが、これは他の書き込みにも見られる。*können* には規範から逸脱した *h* が入っており²⁵、逆に *ihm* の *h* が落ちて *im* となっている。さらに、*stunt* (Stunde)、*spröch* (sprechen) のように語尾が消失している。またそもそも句読点もない。これらはまさに、「書字規範や正書法を無視した」（大黒 2019: 101）言語使用である。

家政婦たちのドイツ語について、カールは筆談帳のなかで次のような興味深いコメントをしている。

Die hochdeutsche Sprache ist verschieden von der gemeinen Mundart, so daß ich fast glaube, daß sie Manches wirklich nicht verstehn. So z. B. sagtest du gestern zum Mädl, es solle noch Brühe bringen; das Wort ist ihnen unbekannt. Schindler mußte es in die gewöhnliche Sprache: laute Suppe übersetzen, da verstand sie es. So mag sie auch gestern abend aufdecken mit aufbetten verwechselt

24 1840年頃のオーストリアとハンガリーでも、文盲率は40～50%であった（エンゲルジング 1985: 178）。

25 例：Sieh [= Sie] (BKH, Bd.7: 251, Heft 88, 45r), Wahsser [= Wasser] (BKH Bd.11: 69, Heft 129, 21v)

haben, weil sie sich anschickte, das Bett zu machen. Auch schien die Haushälterinn nicht zu verstehen, als du einen Faden Garn verlangtest; sie kennt nur Zwirn. Sie schreiben, wie sie sprechen, statt nach der allge[m] einen Regel zu sprechen, wie man schreibt. (BKH Bd.5: 60, Heft 51 16r)

「標準ドイツ語は野卑な方言と違っているから、あの女（ひと）たちは本当に聞いても意味が分からぬことが結構あるんじやないかと思うんです。例えばおじさんは昨日、女中に「だし汁」（Brühe）をもってこいって言ったけど、この言葉をあの人たちは知らないんです。シンドラーが普通の言葉に言い換えて「すまし汁」（lautre Suppe）って言ったおかげでやっと分かったんですよ。それに、あの女（ひと）昨日はたぶん「aufdecken（テーブルの用意）」ということばを「aufbetten（ベッドの用意）」と取り違えたんだと思うんです。だっていきなりベッドの支度をしようとしましたからね。家政婦さんも、おじさんが Garn（糸）を一本くれって言ったとき、意味が分からなかつたみたいでした。Zwirn（糸）っていうことばしか知らないんですね。あの人たちは話す通りに書くのであって、書き方を教える一般的な規則に従っては書かないんです。」

ここでカールは、ベートーヴェンが言った *Briühe, Garn* という単語を家政婦が知らないこと、*aufdecken* を *aufbetten* と取り違えたのではないかと書いている。

また、1824年9月の書き込みでは、ベートーヴェンが引っ越しの日をホルツマンに尋ねた際、家政婦のホルツマンは *gichgi* と書いたが、おそらくベートーヴェンには意味がわからず、カールがすぐさま *Georgi²⁶* と書き直している。

HOLZMANN: *gichgi* NEFFE: *Georgi* (BKH Bd.6: 343. Heft 75, 22v)

先ほどの引用で、カールが「あの人たち（家政婦さんたち）は話す通りに書く」と書いていたが、これは音声がそのまま文字化された例であるといえる。

ベートーヴェンと家政婦ホルツマンとの意思疎通がうまくいかず、たびたびトラブルに発展することがあったようである。以下の引用は、言いつけた仕事を指図通りにしなかつたことに腹を立てたベートーヴェンに罵詈雑言を投げつけられたとホルツマンがカールに訴え、カールがベートーヴェンに意見している書き込みである。

Ich weiß nicht, worüber du böse bist. Ich kann mich nicht erinnern, gelacht zu haben. Indessen muß

26 *Georgi* というのは *Georgstag* の別名 *Georgitag* のことで、ウィーンでは4月24日がこれに当たる (BKH, Bd.6: 428)。

ich gestehen, daß sie [筆者注 : Barbara Holzmann] mir auf dem Weg mit Thränen geklagt hat, daß du sie zu sehr quälst, und daß sie lieber gehen will, als sich länger in ihren alten Tagen so mißhandeln zu lassen. Wenn du ihr befohlen hast, zu waschen, so hat sie nur ihre Pflicht gethan. Sie gesteht aber, daß sie auch unrecht verstanden haben kann.[...] Ich kann nicht essen, bevor ich mich nicht ausgeweint habe; es wäre Gift, wenn ich in den Verdruß hinein essen sollte. (Heft 28, 29r: S.160 f.)

「伯父さんが何をそんなに怒っているのか分かりません。笑ったつもりなどありません。でも、本当のことを言えば、あの人 [Barbara Holzmann] が道々涙ながらぼくに訴えるんです。伯父さんがひどくいじめるって。この年になってこれ以上こんなひどい目に遭わされるぐらいなら、いっそ辞めたほうがましだ、って言うんです。伯父さんが洗濯しろって指図したのなら、あの人はただ自分の義務を果たしただけじゃないですか。でも、指図を聞き間違えたのかもしれないとは言ってました。(中略) 思いきり泣いてからじゃないと食べられません。胸が詰まっているところに無理に食べたりしたら毒ですから。」

6. 最後に

以上見てきた限りにおいて、18世紀後半に規定された東中部ドイツ語型の官製の言語規範（テシス）を学校教育の中で正しく習得するだけでなく、言語使用（ノモス）において筆談帳への書き込みという咄嗟の瞬間ににおいてさえ例外なく実践できた、甥カールのリテラシーの高さは特筆に値する。「過去のリテラシーは『書かれたもの』を通じてしか知りえ」（大黒 2019: 96）ず、「実態を実証的に解明するのはきわめて困難」（大黒 2019: 96）である。その意味で、家政婦のホルツマンと甥カールを両極にしてベートーヴェンの筆談帳のなかで繰り広げられたリテラシーの協奏は、歴史的段階のことばを話し手と聞き手の社会的属性や発話状況に関わる情報もろとも再構成しようとする「歴史語用論」の視点から見てきわめて興味深い（高田・椎名・小野寺 2011: 6-28 参照）。筆者は、文字で伝承されたテクストを読み解いて、過去の言語的相互行為を社会・歴史と発話状況のコンテクストと関連づけ、分析するアプローチでさらに筆談帳の調査を進めていきたい。

参考文献

調査資料（ベートーヴェン関連）

Beethoven's Conversation Books, edited and translated by Theodore Albrecht. Boydell Press: Woodbridge 2018-2022. [Volume 1, Nos.1-8 (2018); Volume 2, Nos. 9-16 (2019); Volume 3, Nos.17-31 (2020); Volume 4, Nos. 32-43 (2022).]

Ludwig van Beethovens Konversationshefte [BKH], herausgegeben im Auftrag der Deutschen Staatsbibliothek Berlin von Karl-Heinz Köhler, Grita Herre und Dagmar Beck. Leipzig: Deutscher Verlag für Musik 1972-2001. [Band 1, Hefte 1-10 (1972); Band 2, Hefte 11-22 (1976); Band 3, Hefte 23-37 (1983); Band 4, Hefte 38-48 (1968); Band 5, Hefte 49-60 (1970); Band 6, Hefte 61-76 (1974); Band 7, Hefte 77-90 (1978); Band 8, Hefte 91-103 (1981); Band 9, Hefte 104-113 (1988); Band 10, Hefte 114-127 (1993); Band 11, Hefte 128-139 mit Registern zu den Bänden 1, 4, 5 und 6 (2001).]

Beethoven-Haus Bonn, <https://www.beethoven.de/de> (最終閲覧日：2025年4月28日)

他の一次資料

Adelung, Johann Christoph: *Grammatisch-kritisches Wörterbuch der hochdeutschen Mundart*. 4 Teile. Leipzig. 1793/1796/1798/1801. Nachdruck: Hildesheim/New York 1970.

Adelung, Johann Christoph: *Kleines Wörterbuch der Orthographie, und der deutschen Sprache*. 9. Aufl. Wien 1795.

Adelung, Johann Christoph: *Kleines Wörterbuch der deutschen Sprache, für die Aussprache, Rechtschreibung. Beugung und Ableitung* [...] bearbeitet von Franz Leopold Schmiedel. 3 Bände. Wein 1819.

Allgemeine Schulordnung für die deutschen Normal-, Haupt- und Trivialschulen in sämmtlichen Kaiserl. Königl. Erbländern. Wien 1774

Anleitung zum Schönschreiben nebst Vorschriften zum Gebrauche der deutschen Schulen in den kaiserlich-königlichen Staaten. Wien 1775.

Anleitung zum Schönschreiben zum Gebrauche der deutschen Schulen in den k. k. Staaten. Troppau 1786.

Antesperg, Johann Balthasar: *Das Josephinische Erzherzögliche A.B.C. oder Namen-büchlein*. Wien 1744.

Anweisung, die deutsche Sprache richtig zu sprechen, zu lesen und zu schreiben nebst Beyspielen von Briefen und andern schriftlichen Aufsätzen. Zum Gebrauche der Trivial-Schulen in den k. k.

Staaten. 1793

[Felbiger, Johann Ignaz von]: *Anleitung zur deutschen Rechtschreibung zum Gebrauche der deutschen Schulen in den kaiserlich-königlichen Staaten*. Wien 1774.

[Felbiger, Johann Ignaz von]: *Anleitung zur deutschen Sprachlehre zum Gebrauche der deutschen Schulen in den kaiserlich-königlichen Staaten*. Wien 1775

[Felbiger, Johann Ignaz von]: *Methodenbuch für Lehrer der deutschen Schulen in den kaiserlich-königlichen Erblanden*. Wien 1775

[Felbiger, Johann Ignaz von]: *ABC oder Namenbüchlein zum Gebrauche der Schulen in den kaiserlich-königlichen Staaten*. Wien 1776.

[Felbiger, Johann Ignaz von]: *ABC oder Namenbüchlein zum Gebrauche der Stadtschulen in den kaiserl. königl. Staaten* Wien und Freyburg im Breisgau. 1786.

[Felbiger, Johann Ignaz von]: *Deutsche Sprachlehre zum Gebrauche der deutschen Normal- und Hauptschulen in den k.k. Staaten*. Wien 1794.

Forderung an Lehrer der Trivial-Schulen in den k. k. österreichischen Staaten. Wien 1824.

Nahmenbüchlein zum Gebrauche der Stadtschulen in den kaiserl. königl. Staaten. Prag 1825.

Sammlung aller k.k. Verordnungen und Gesetze aus dem Jahre 1740 bis 1780, die unter der Regierung des Kaisers Josephs des II. theils noch ganz bestehen, theils zum Theile abgeändert sind, als ein Hilfs- und Ergänzungsbuche aller unter der Regierung des Kaisers Josephs des II. für die k.k. Erbländer ergangenen Verordnungen und Gesetze in einer chronologischen Ordnung. 8 Bde. Wien 1786.

二次文献

エンゲルジング、ロルフ [中川勇治訳] (1985) 『文盲と読書の社会史』思索社.

大黒俊二 (2019) 「(特集:歴史資料の現在) 史料をなぜ分類するのかー『限界リテラシー』と
いう切り口」『西洋史学』268巻、92-105.

クーパー、バリー (1997) 『ベートーヴェン大事典』(平野昭・西原稔・横原千史訳) 平凡社.

鯨岡さつき (2019) 「18世紀後半のオーストリアにおける文章語の標準化をめぐって—マリア・
テレジアの学校改革がもたらしたもの」『学習院大学ドイツ文学会研究論集』23号、57-79.

高田博行・椎名美智・小野寺典子 (編) (2011) 『歴史語用論入門—過去のコミュニケーション
を復元する』大修館書店.

山之内克子 (2006) 「啓蒙期オーストリアにおける教育—初等学校の制度的変遷を中心に」

19世紀初頭ウィーンにおける言語規範と言語使用

浅野啓子・佐久間弘展編著『教育の社会史——ヨーロッパ中・近世——』知泉書館、
271–289.

Engelbrecht, Helmut: *Geschichte des österreichischen Bildungswesens, Band 3. Von der Frühen Aufklärung bis zum Vormärz*. Wien: Österreichischer Bundesverlag 1984.

Engelbrecht, Helmut: *Erziehung und Unterricht im Bild: Zur Geschichte des österreichischen Bildungswesens*. Wien: ÖBV Pädagogischer Verlag 1995.

Ernst, Peter: *Deutsche Sprachgeschichte. Eine Einführung in die diachronische Sprachwissenschaft des Deutschen*. 3. Auflage. Wein et al.: UTB 2021.

Gessinger, Joachim: *Sprache und Bürgertum. Zur Sozialgeschichte sprachlicher Verkehrsformen in Deutschland des 18. Jahrhunderts*. Stuttgart: Metzler 1980.

Helfert, Joseph Alexander von: *Die österreichische Volksschule. Geschichte, System, Statistik*. Bd.1. Prag 1860.

Helfert, Joseph Alexander von: *Die österreichische Volksschule. Geschichte, System, Statistik*. Bd.3. Prag 1861.

Loesch, Heinz von/Claus Raab: *Das Beethoven-Lexikon. (Das Beethoven-Handbuch, Bd 6)*. Laaber: Laaber, 2008.

Schmid, Karl Adolf: *Encyklopädie des gesammten Erziehungs- und Unterrichtswesens*. Bd.2. Gotha 1878.

Polenz, Peter von: *Deutsche Sprachgeschichte vom Spätmittelalter bis zur Gegenwart. Band 2. 17. und 18. Jahrhundert*. 2. Auflage bearbeitet von Claudine Moulin unter Mitarbeit von Dominic Harion. Berlin/Boston: De Gruyter, 2013.

Riecke, Jörg: *Geschichte der deutschen Sprache. Eine Einführung*. Stuttgart: Reclam, 2016.

Wiesinger, Peter: Die sprachlichen Verhältnisse und der Weg zur allgemeinen deutschen Schriftsprache in Österreich im 18. und 19. Jahrhundert. In Andreas Gardt/ Klaus J. Mattheier/ Oskar Reichmann (Hrsg.): *Sprachgeschichte des Neuhochdeutschen. Gegenstände, Methoden, Theorien*. Tübingen: Niemeyer 1995: 319–367.

Wiesinger, Peter: *Das österreichische Deutsch in Gegenwart und Geschichte*. 3., aktualisierte und neuerlich erweiterte Auflage. Wien: LIT 2014

Wolf, Stefan: *Beethovens Neffenkonflikt. Eine psychologisch-biographische Studie*. München: G. Henle 1995.

変遷するドイツ語標準発音

– テシスとノモスから見る発音規範の考察 –

高橋 秀彰

1. はじめに

ドイツ語の発音規範は、1898年に Theodor Siebs らにより出版された『ドイツ語舞台発音』(Deutsche Bühnenaussprache)を基盤に発展してきた。1871年にドイツ帝国が誕生して中央集権的な統治機構を構築する過程で、言語の統一も重要な課題であった。舞台俳優の発音をモデルとした標準発音の記述は、その後はマスメディアの発展とともにニュースのアナウンサーをモデルとする方向へと推移した。Siebs の発音辞典は1969年まで改訂され、その間に Duden や Halle 学派による発音辞典が出版されているが、徐々にコーパスを使用した記述が中心になっている。今日の辞典編纂者は、実際に使用されている「使用規範」(Gebrauchsnorm)をノモスとして抽出することを目的としている。しかし、こうした発音辞典はテシスとして著者の意図を超えて影響力を持ち、「正しい」発音として規範性を帯びてくる。ここでいうノモスとテシスは、それぞれ慣習によって構築される *nomo* と人間の決定によって慎重に構築される *thesei* に由来し、それぞれ人間の行為 (action) により創造される結果と、人間の構想 (design) により創造される結果 (Hayek 2013: 20) に対応している。記述主義を推し進めてきた結果、成文規範は多様化が進み、統一化を含意する「標準語」の意味も変遷している。本稿では、発音規範に注目しながらテシスとしての発音辞典を分析し、ノモスの収束と分散の傾向を見出す目的とする。

使用規範をノモスと考えた場合には、どのようなモデル話者を基準に考えるのか、またそこから得られる多様性をどのように成文規範に反映させるかという問題がある。これまで舞台俳優からニュースのアナウンサーへとモデル話者が推移しているが、一般の話者までも対象にするべきか、またその場合の条件をどうするかについては十分な検討がなされていない。さらに、こうした問題は、国別標準変種 (nationale Standardvarietät) や地域変種 (areale Varietät) の記述と組み合わせて考察しなければならない。ノモスは一定の条件下での言語行為において確認される収束の結果として生成されるが、実証調査の規模が拡大し、使用規範が分散すればテシスの容態も大きく変容する。本稿ではテシスとして、Siebs (1969, *Deutsche Aussprache - reine und gemäßigte Hochlautung mit Aussprachewörterbuch*)、Duden (2023) (*Das Aussprachewörterbuch*)、

DAW (Krech et al. 2009, *Deutsches Aussprachewörterbuch*) における記述、ノモスとして *Atlas zur Aussprache des deutschen Gebrauchsstandards* (AADG) を中心に分析し、現代の「正しい」ドイツ語発音とは何かを考察したい。

2. 発音辞典における標準発音

(1) Siebs

発音辞典では標準形式の記述が目的であり、そこでは規範核の記述が中心となると考えられる。Siebs による発音辞典は 1898 年の初版刊行から版を重ねて、Theodor Siebs が 1941 年に没した後も Siebs の名称を掲げて出版され続けた。1969 年に出版された第 19 版は最終版となるが、地域特性を含めて標準発音を見直し、見出し語中でも変異形を記述するなど画期的な発音辞典であった。ほとんどの教養人の日常会話語 (Umgangssprache) は、音声的に多かれ少なかれ地域的な影響を受けていながらも、標準発音からの逸脱には共通性が見られるとしている。Siebs (1969) では、標準発音 (Hochlautung) を「純粋標準発音」(reine Hochlautung) と「緩和標準発音」(gemäßigte Hochlautung) に分けて記述している。「純粋標準発音」(reine Hochlautung) は「理想規範」(Idealnorm) であり原則として変異形を認めていないのに対して、「緩和標準発音」(gemäßigte Hochlautung) では地域特性を考慮した変異形を記述しており、純粋標準発音よりも具現化される際の変異の幅を広く認めている (Siebs 1969: 6)。

その上で各論では標準発音からの逸脱に関しての注意書きが詳しくなされている。Siebs (1969: 97) では、Stein や Spiel などで北ドイツの発音でき聞かれる [st, sp] は方言的特徴なので標準語では避けるべきことが明記している。また、Siebs (1969: 84) は R 音の発音は舌先震え音 [r] と口蓋垂震え音 [R] のいずれでもよいと記述していて、これは「してもよい」ことを表す許容規範である。さらに、口蓋垂摩擦音 [ʁ] を認めているが、特に [t] の前で、北ドイツの話者でよく聞かれるような軟口蓋摩擦音 [x] になって、['vaxten] と発音してはいけないと指摘している (Siebs 1969: 86)。つまり適用条件にて、「してはいけない」という義務規範により、北ドイツの使用規範と考えられる発音を排除しているのである。一方、[p, t, k] は、北ドイツで一般的であるように、強く気息を伴って発音することが記されている (Siebs 1969: 104)。

(2) DAW

DAW は旧東ドイツのハレ大学の研究者により編纂された発音辞典であるが、その歴史は 20 世紀半ばに遡る。Der Deutsche Ausschuss für Sprechkunde und Sprecherziehung の研究者である

変遷するドイツ語標準発音

Irmgard Weithase (イエーナ) と Hans Krech (ハレ) が 1953 年に、包括的な経験的調査に基づいて Siebs の刷新を図る提案をしたが、拡大 Siebs 委員会 (Erweiterter Siebs-Ausschusses) では受け入れられなかった。そのため、1957 年に Felix Trojan と Helmut de Boor 編集主幹のもと出版された第 17 版では、国際音声表記を使用する他に目新しさはなかった (DAW 2009: 231)。そのため Hans Krech は 1953 年にて正音法研究 (Orthoepieforschung) を開始し、ハレ大学の研究者 (以下、ハレ学派) により相次いで研究成果が発表された。こうした研究を通じて、伝統的な舞台発音ではなく標準語として実際に発話されている発音が記述された発音辞典の編纂が進んだ。この辞書を通じて、ドイツ内にある国境線による不幸がさらに深まらないように、最も大切な手段である話すことばへの統一を図ることを目的とした (Krech 1961: 48-49)。その成果として 1964 年に *Wörterbuch der deutschen Aussprache* (WDA) が出版された。その後 WDA は 1974 年に第 4 版が出版され、1982 年には拡大改訂版となる *Großes Wörterbuch der deutschen Aussprache* (GWDA) が出版された。ハレ学派による発音辞典は精密な音声学的調査に基づき記述されたもので、その集大成となる発音辞典が Krech, Eva-Maria et al. (2009): *Deutsches Aussprachewörterbuch* (DAW) である。

DAW (2009: 7) は標準発音の特徴を 7 つに分けて説明している。

- (1) ドイツ語の各変種に中立的で、地域的な色合いを帯びた口語表現は含めない。
- (2) 公式・公的な場面で使用されることが期待されている。
- (3) 標準発音の使用は、こうした場面に権威を付与する。
- (4) 調音の正確さはさまざまな程度により特徴づけられるが、その使用は公的な場面でなくとも可能とする。
- (5) 標準発音は成文化されており、明確な規範として言語使用を調整する機能を持っている。
- (6) 標準発音の成文化は、使用者に期待されている実際の言語使用を考慮するが、常に検証を必要とする。
- (7) 成文化された規範が拘束力を持つ程度はさまざまである。規範に従わない場合には、負の制裁が課せられることがある。

DAW (2009: 6) によると、こうした標準発音は高い権威を持ち、公共の場面、公的な場面で使用され、また使用されることが期待されている。言語使用の記述は言語の成文化とは異なり、成文化の前段階であるとしている。成文化された規範の使用は聞き手の期待に沿うものであり、職業話者 (Berufssprecher) を狭義と広義に分けて説明している。狭義の職業話者は、超地域的

な放送での話者、正確な調音が求められる芸術的なテクストの発声に関わる話者（俳優、朗読者）、外国語としてのドイツ語教育に携わる教員、歌手やその教育者、言語聴覚士とその教育者、またこうした職業の教育に関わるあらゆる人を指している。一方、広義の話者は、学問、文化、経済、政治など公共の場で発話する人、あらゆる分野の教育者を指している。成文規範の拘束力には程度の差があるが、狭義の話者では拘束力が強くなる。

標準発音を記述するにあたり DAW (2009) では、音声の実証調査だけではなく、実際の発話での聴者の期待 (Erwartung) (上記特徴の 6 に関連) に関する社会音声的な調査も取り入れている。また、超地域的な受容を目指しているマスメディアの番組における発話をデータとして使用しているが、ニュース番組とトークショーなどの会話など対照をなすものも調査し、朗読調と自然発話との相違についても検討している (DAW 2009: 16)。また、DAW (2009) はドイツ語の複数中心地性 (Plurizentrität) を考慮に入れて、ドイツ (3-228)、オーストリア (229-258)、スイス (259-277) の標準変種に関する章をそれぞれ設けて詳細に記述している。

(3) Duden

Duden (2023: 33) は、同書が対象とする標準発音が持つ本質的な特徴として以下の 4 点を挙げている。

- (1) 言語コーパスや質問紙などを使用した経験的調査に依拠し、特定の地域を超えて活動している専門的な話者の言語使用に加えて、一般の話者の間で通常使用されている標準発音を考慮しているため、実態に近い使用規範である。
- (2) 地域を超えて通常使用されている発音形式だけではなく、ドイツ語圏の特定の国家で使用されている形式や広範な地域で使用されている形式も含めている。
- (3) 音韻的には原則として統一的に記述する。そのため、効率よく表示するために、標準語の国家・地域変種に見られる体系的な音声的並びに音韻的な変異は、辞書部では記述しない。こうした変異は独立した章で取り上げる。こうした音韻モデル (das phonologische Muster) は地域の枠を超えた標準発音を構成しており、専門的な話者がドイツのメディアで使用しているような発音である。ただし、音素レベルで体系的でなく、不規則に出現する変異についても、そのことについてわかっている際には記述する。
- (4) 原則として文字に近い発音形式であるが、書記と発音の規則的な対応関係にずれが生じている場合には、実際の言語使用に従う。

ここでは標準発音の説明をしているはずだが、説明中で「標準発音」(Standardaussprache) (1) や「標準語」(Standardsprache) (3) が十分な定義をせずに使用されているところに問題がある。上述のように、「一般の話者の間で通常使用されている標準発音」を考慮していることから、使用規範を標準発音と考えるとの説明は循環定義である。音韻モデルとしては、ドイツのメディアで使用されている専門的な話者、つまりアナウンサーなどの発音とすることが記述されている。ただ、こうした音韻モデルと使用規範との関係については説明がない。(1) でいう使用規範は AADG で確認された発音形式と考えられるが、これは音声的な特徴であり、こうした多様な音声的な特徴と音韻体系との関係は容易に説明できないはずである。ここで書かれている標準発音の 4 つの特徴は、模範話者の対象 (一般話者、専門的な話者)、地域、国家、音声、音韻、音素と書記素の対応関係、現実の使用を反映した使用規範など、多面的な要素が混在しており問題が多いといわざるをえない。

国家や地域の変異形については、「ドイツ語標準発音」(Die Standardaussprache des Deutschen) の章の第 3 節「標準語の変異」(III. Variation in der Standardsprache) で、公的な場面で使用される使用規範の特徴として詳細に記述している (Duden 2023: 65-76)。選択基準は、主に出現頻度と広域あるいは国家レベルでの普及とし、中には専門的な話者は使用しないが、一般の話者の中では幅広く使用されている形式も含めている。当該変異形の知覚レベルでの顕著な特徴や地理的な広がり、社会言語学的な容認レベルについてはさまざまであるが、いずれも公的な場面で使用される使用規範の特徴であるとしている。

例えば、*Rad* や *Bad*、*Glas* など一連の単音節語は、北ドイツ並びに中部ドイツの一部では短母音も広く使われていることが記述されている (Duden 2023: 67)。<g> の摩擦音化による変異形 [ç x] も挙げられている (Duden 2023: 70-71)。この例では、地域を超えた標準発音では閉鎖音 [k] となるところを、音声環境によっては摩擦音化した [ç x] で具現化される形式で、北部・中部の全域と南ドイツ北部で使用されていると指摘している。*Tag* [x]、*Zeug* [ç]、-*burg* [ç] や、動詞の語尾 -*gt* が使われる *gekriegt* [ç]、*gesagt* [x] などが挙げられる。ただし、今日の標準語環境での [ç x] の出現は、頻出語 (例えば、*kriegt*、*sagt* など動詞の活用語尾 -*gt*) や日常の自然発話 (Spontansprache) に限られ、朗読では [k] が使用されるとしている。中部ドイツ語圏では、超地域的な標準形である [ç] が地域的な硬口蓋摩擦音 [ʃ] や歯茎硬口蓋摩擦音 [ç] として具現化される事例を挙げている (Duden 2023: 72)。例えば、*Kirche* ['kɪrcə] が ['kɪrʃə] や ['kɪrcə] のようになり、*Kirsche* とほとんど同じ発音になることが記述されている。さらに、[ç] が地域的な [ʃ] や [ç] になるのを避けようという意図から、本来の発音が [ʃ] であるものが [ç] や [ç] になることもあるとしている。例えば、*praktisch* ['praktiç /-ç]、*Fleisch* ['flaɪç/-ç] である。この変異形 ([ç]

や [e]) は、実際に地域的標準発音としてもよく用いられているのに、地域レベルでも標準形とは見なされていないとの記述がある。この記述は曖昧であり、標準語を使用すべき環境でも用いられることがあるが、地域レベルでも標準形とは見なされていないとの内容で表現すべきだろう。明らかに過剰修正による問題を指摘している部分である。

3. ノモスと実証調査

ここでは「ドイツ語使用規範の発音地図」(*Atlas zur Aussprache des deutschen Gebrauchsstandards*, AADG)における調査結果を分析し、その問題点について考察する。AADG¹は2011年に開始されたプロジェクトで、*Deutsch heute* コーパスに基づいてドイツ語の発音を記述することを目的としていて、*Duden* 発音辞典の記述の基盤にもなっている。そこではドイツ語標準発音の音素体系全体を記述しながら、できるだけ多くの地域変異形を記述することも重視している。2021年末までにその評価をほとんど終えているが、その後も継続的に音声変異の記述を推敲している。2024年2月29日時点で、336点の言語地図と解説が含まれている。

コーパスのデータは、*Oberstufenschüler* が単語リストを朗読したものを中心に構成されている。そこでは *Oberstufenschüler* の定義がないが、一般的な理解ではギムナジウムの上位学年（10～12年か13年）に相当する生徒と考えられる。一人当たりの時間は20分から30分としている。朗読での発音なのでフォーマルは発音が得られ、670名の被験者の発話データを比較しやすくなるという長所がある。*Deutsch heute* コーパスは、910語、近似的発音の166語を2語ないし3語の組み合わせにしたもの（部分的にミニマルペア）、日付表示等を表す29の数字、1から25までの数字を導き出す刺激語から構成されている。朗読用のテクストは（1）*Nordwind und Sonne* (113語)、（2）*Schluss mit dem Gesundheitsterror* (531語) (04/2006, P.M.-Magazin)、（3）調査したい発音を含む自作テクスト (862語) の3部から構成されている。さらに、75枚の絵を見せて、その名称を答えてさせる質問を続ける。最後に、24語の英単語、それに続く10の英語短文をドイツ語に訳す課題が続く。この2つの課題の目的は、発音する際に文字による視覚的な影響を排除するところにある。最後に、経歴を問う質問と Map-Task-Design を用いたアクティビティからなる30分ほどのインタビューがある。Map-Task-Design は Anderson et al. (1993) が HCRC Map Task Corpus のために開発した課題で、説明者は個々の絵とそれをつなぐ線が書かれた用紙持ち、相手は個々の絵だけが書かれた用紙を持つ。説明者は、口頭で説明して、相手が絵をつなぐ線を同じように書くよう口頭で誘導するという課題である。

こうして得られたデータは、（1）母音、（2）子音、（3）接辞等の音節、（4）アクセントや子

1 <https://prowiki.ids-mannheim.de/bin/view/AADG/WebHome>

音挿入などの現象、(5) 語彙的特徴や自然会話の特徴等の5項目に分けて分析している。本稿ではそれぞれの項目から1つずつ例を取り上げて考察したい。

3.1.1 AADG —— 母音の長短 *Rad*、*Raddampfer*、*Bad*、*Glas*、*Spaß*

AADG では長音と短音の変異が確認されている。歴史的にはいずれも短音であったが、例えば *Rades*、*Räder* では *a/ä* が長音として発音されることから、その類推で長音化が進んだと分析している。*Rad* (短音 39 %)、*Raddampfer* (短音 65 %) は、北部並びにノルトライン＝ヴェストファーレン州では短音で発音される傾向が確認された。*Rad* が長音で発音されている地域においても、複合語の *Raddampfer* になると短音で発音される傾向が確認された。この要因を AADG は、*Hektoliter* の例を挙げて説明している。*Liter* 単独においては超地域的な発音である長母音が優勢であるが、*Hekto* と *Liter* の複合語になると *Liter* が短母音化する現象に似ていると説明しているが、疑問が残る。*Rad* 単独の場合には話者の意識が強く母音に向かうため、超地域的な発音である長母音となるが、*Raddampfer* は複合語であることから最初の母音への意識が逸らされ、その地域の日常語でより頻繁に具現化される形式である短母音が発生すると説明している。しかし、*Raddampfer* の *Rad* は強音節であるのに対して *Hektoliter* の *-liter* は弱音節なので同列では比較できないだろう。弱音節の *-liter* で短母音化の傾向が見られるのは理解できるが、強音節の *Rad* でも短母音化の傾向が確認できる理由にはならない。そもそも使用規範の調査を行なっている中で、意識して発音すれば超地域的な発音になるという説明は理解しにくい。使用規範と超地域的な規範を使い分けているとすれば、規範に階層性があることを認めることとなり、成文化に際してはどのレベルを記述の対象とするかの議論が必要となる。

Bad も *Rad* と同様で北部を中心に短音が確認されているが、短音の頻度は 24% と *Rad* よりも低くなっている。*Glas* も北部で確認されているが、短音の頻度はわずか 5% ほどである。*Spaß* については、北部は長音が多いが、南部では短音も確認され、特にルクセンブルクでは短音が多くなっている。イタリア語の *spasso* からの外来語で、原語で短母音であることが特に南部に影響していると AADG は分析している。マップを見ると、オーストリア西部からスイスにかけて短音が分布していることがわかる。*Spaß* の発音は正書法規則とも連動し、*a* が長母音であるから *β* になっている。つまり短母音としての調音は正書法規則に照らすと誤りとなってしまうが、原語の影響を受けて短母音を使用する地域があることは興味深い。

3.1.2 発音辞典 —— 単音節での母音の長短 *Rad*、*Raddampfer*、*Bad*、*Glas*、*Spaß*

Siebs (1969: 146) では、単音節の語 *Rad*、*Raddampfer*、*Bad*、*Glas*、*Spaß* などの短母音での発

音については、規範から逸脱した地域的特徴で、洗練された発音では規範に沿わないので避けるべきとしている。「a + 齒茎音」（例えば、*Gas*、*Glas*、*Gras*、*Bad*、*Rad*、*grob*、*Buch*）などで長音の代わりに短音で発音する形式は標準発音ではないと明確に指摘している。

DAW では単音節での母音の長短に関する具体的な記述は見当たらず、見出し語の発音表記ではいずれも長音で記述されており、短音での発音は標準発音とはみなしていない。

Duden (2023: 67) では長音と短音の変異形について詳しく記述されている。*Rad*、*Bad*、*Glas*、*Gas*、*Schlag*、*Tag*、*Zug*などの単音節語は、ドイツ北部や部分的にはドイツ中部においては短母音でも発音されるとしている。ただし、曲用して2音節になれば、常に長母音で発音される（例えば、単音節 *Rat* [rat]、2音節 *Rades* [ra:dəs]）。

またこれとは逆に、硬音や子音連鎖の前の母音は、南部においては一般的な短母音と並んで長母音も普通に使用されている。例えば、*lutschen* は東中部や南東部ドイツ語圏とオーストリアでは長母音で発音される。これに対して、スイスと南西ドイツにおいては、*Rost*、*rösten*、*Rache*、*räche* などが長母音で発音されるとしている。加えて、*das*、*was*、*es* などの代名詞や冠詞類にアクセントが置かれる場合には、特に南部では長母音で発音されることが多いとしている（例えば、[da:s]、[va:s]、[e:s]）。

	<i>Bad</i>	<i>Glas</i>	<i>Rad</i>	<i>Spaß</i>
Siebs	¹ ba:t, ¹ be:dər; ² ba:t, ² be:dər	gla:s, ¹ gle:zər; ² gle:zər	ra:t	ʃpa:s, ʃpe:sə
DAW	ba:t	gla:s	(Geräteteil, Fahrrad) ʁa:t (pysik. Einheit) ʁat	ʃpa:s
Duden	ba:t, bes. nordd. auch: bat	gla:s	ra:t, bes. nordd. auch: rat	ʃpa:s

表1 単音節での母音の長短

3.2.1 AADG —— 短母音 /ɪ/ の変異形 *Gipfel*、*Schlitten*、*Lippe*、(den) *Fischen*

4語を用いて聴覚音声学的手法により母音の調音を、最も閉鎖の強い [i] から [i]、[ɪ]、[i]、[i]、[ɪ] へと中央化し、シュワー [ə] に至る7つの発音に分類している。ドイツでは西部と南西部の一部を除いて弛緩音の [ɪ]、[i]、[i]、[ə] が支配的であるのに対して、スイスとオーストリアではより前方で高い調音点の緊張音 ([i]、[i]、[ɪ]) がほぼ全域に分布している。ルクセンブルクでは全体として閉鎖が強い緊張音が支配的で、東ベルギーでは南部のビュリンゲンでは緊張音だが北部のオイペンでは隣接するドイツと同じ弛緩音である。南チロルでも緊張音が確認されているが、チロル北部ほど強い緊張音ではない。

緊張音と弛緩音の対比は長母音と短母音において、標準発音の重要な特徴とされているが、オーストリアとスイスではこの対比がほとんど見られないので、従来から指摘されてきたようにスイスとオーストリアの標準変種と考えられる²。

3.2.2 発音辞典 —— 短母音 /ɪ/ の変異形 *Gipfel*、*Schlitten*、*Lippe*、(den) *Fischen*

Gipfel、*Schlitten*、*Lippe*、(den) *Fische*などの短母音 /ɪ/ は、Siebs (1969: 66) では弛緩音を標準発音として、緊張音はオーストリアを含むバイエルン方言やシュヴァーベン方言でよく聞かれるが、避けるべきであるとしている。

DAW (2009: 237) では、オーストリアでは高舌母音において長音と短音の質的な区別が少なく、ドイツ（特に中・北部）の標準発音とは異なり、いずれも緊張音として発音されるので、同じ発音記号で記すことを勧めている。例えば、*bitten* [bɪ̯itn] と *bieten* [b̯i̯:tn]、*hissen* [h̯i̯sn] と *hießen* [h̯i̯:sn]、*Puppe* [p̯u̯pe] と *Hupe* [h̯u̯:pe]、*Busse* [b̯u̯se] と *Bu̯ße* [b̯u̯:se]、*füllen* [v̯yln] と *fühlen* [v̯y:ln] などである。スイスについては、緊張音と弛緩音のいずれも可能であるとしている (DAW 2009: 262)。例えば、*will* は [ɪ] と [i]、*muss* は [ʊ] と [u]、*Müll* は [ʏ] と [y]、*Holz*、*möchte* は [o]、[œ]、[ø] のいずれも可能である。

Duden (2023: 66) では、高舌短母音 /ɪ̯ y̯ ʊ̯/ は、ドイツでは中舌化した発音が一般的であり、長母音 [i: y: u:] よりも通常は広め (offen) の発音になるとしている。標準発音としては弛緩音の [ɪ̯] を記述しているが、オーストリアとスイスでは狭めの緊張音が支配的であり、[i y u] の長母音よりもごくわずかに開いて中舌化した発音になることが記されている（例えば、*Witz* [vits]、*Glück* [glyk]、*Druck* [druk]）。同様の発音は部分的にドイツの西部（プアルツ）と南西部（シュヴァーベン）においても確認されるとしている。

3.3.1 AADG – 接尾辞 <-ig>

接尾辞 <-ig> では 3 つの変異形 [ç]、[ɛʃ]、[k] が記述されている。対象となる語は *billig*、*König*、*richtig* であるが、*billig* は単語リストの朗読、*König* は英語からの翻訳課題、*richtig* は文の朗読と自然会話における発音が記述されている³。

2 Ebner (2019: 24 ff.)、Mayer (2006: 26 ff.) などの辞典では、それまでの研究成果を踏まえて、それぞれオーストリア標準変種、スイス標準変種の音声的特徴を記述している。

3 *König* は次の英語からの翻訳課題での発音が記述されている。

“The lion is the king of the animals.”

richtig は以下の文の朗読での発音が記述されている。

„Man kann nur hoffen, dass das Publikum richtig begeistert sein wird ... und Da bekomme ich gleich richtig Hunger und Appetit.“

<-ig> が主に南部では閉鎖音となることは広く知られているが、課題の形式により変異形の分布には大きな相違が見られる。*billig* では、[k] はドイツ語圏全体に幅広く分布しており、[ç] は北部の一部に点在している。*König* の発音はほぼ南北で分かれており、北部は [ç]、南部は [k] が広がっており、ラインラント＝プアルツ西部とザールラント、シュライデン、アーヘンでは [ç/ʃ] が多く見られる。*richtig* (文の朗読) では、バイエルン南部とオーストリアとスイスのほぼ全域、中部から南部の多くの地域で [k] が確認される。その他の地域はほとんどが摩擦音 [ç] だが、一部の地域 (特にビュリンゲン、シュライデン) では [ç/ʃ] も見られる。*richtig* (自然会話) では、バイエルン南部とオーストリア (リンツを除く) とスイスのほぼ全域、バーデン＝ヴュルテンベルク州最南端で [k] が見られるが、その他のほとんどの地域では摩擦音が広がっている。ザクセン州からラインラント＝プアルツ州、ベルギー東部にかけての中部では ([ç] が記録されているシュマルカルデン、フルダ、シュヴァルムシュタットを除いて) [ç/ʃ] が中心的な変異形になっている。

このように <-ig> の発音分布が課題の種類により異なっているところは興味深い。AADG は、朗読課題においては綴り字の視覚的影響があり、g は閉鎖音で発音される傾向が確認されると分析している。この傾向は個々の単語を読み上げる単語リストで顕著である。方言並びに日常語で語末にある無声子音前の g を摩擦音で発音する地域 (北部、中部、南ドイツ北部)、[ç/ʃ] が見られる中部ドイツではその発音を避けようという意識が働き [k] になると分析している。

<ig> を語尾に持つ形容詞と接尾辞 <keit> からなる名詞 *Notwendigkeit* と *Süßigkeiten* の <ig> の発音はどのように分布しているのだろうか。<ig> の変異形 [ç]、[ç/ʃ]、[k] の分布を見ると、ドイツとオーストリア東部では、コーブレンツ (ラインラント＝プアルツ州) やトゥトリンゲン (バーデン＝ヴュルテンベルク州南部) など一部を除いたほぼ全域で閉鎖音 [k] はほとんど見られない。一方、オーストリア中部からスイスにかけては幅広く閉鎖音 [k] が確認されている。スイスにおいては摩擦音 [ç] が増える傾向が確認できるが、摩擦音は一部に止まっている (18%–22%)。摩擦音 [ç/ʃ] はラインラント＝プアルツ州とザールブリュッケン州、ビュリンゲン、シュライデンで支配的である。ルクセンブルクとチロル地方では閉鎖音 [k] が支配的である。

3.3.2 発音辞典 – <-ig>

Siebs (1969: 100, 103) では、音節末尾の <ig> の発音は [ɪç] を標準形としている。ただし、オーストリアやスイス、南ドイツでは、緩和標準発音において <ig> は [ɪk] と発音される (Siebs 1969: 100)。しかし、接尾辞 *-lich* が付くと心地よい響き (Wohlklang) を調音するという理由により [ɪk] を採用している。そのため例えば、*königlich*、*Königreich*、*ewiglich*、*männiglich* などは、

変遷するドイツ語標準発音

[*'kɔ:nıkliç, 'kɔ:nıkraeç, 'e:vıklärıç, 'mənıkliç*] と発音される。音節末と子音の前では上部ドイツ語 (Oberdeutsch) で一般的な [-ik] ではなく [-iç] を純正標準発音とし、この規則は複合語にも適応される (例えば、*Ewigkeit* ['e:vıçkaet]、*Honigkuchen* ['ho:nıçku:xən])。

DAW (2009: 84) では接尾辞 <-ig> の発音を [iç] としているが、その後に接尾辞 <-lich> が続く場合や後に [ç] が続く場合には [-ik] としている (例えば、*ewig* ['e:vıç]、*ewiglich* ['e:vıklärıç]、*König* [k'ø:nıç]、*königlich* [k'ø:nıkliç]、*Königreich* [k'ø:nıkraeç] など)。ただし、オーストリアの発音については 3 つのレジスターに区分して説明している (DAW 2009: 235)。一般人の発音では綴り字に従って破裂音 [ig] で発音される (例えば、[k^h'ø:nıg]、['ɛsɪg]、[b_ø'ılg]、[v_ø'ɔlkıg]、[h'aɛlg] など) (DAW 2009: 247)。これに対して、訓練を受けた話者による高尚な標準発音では Siebs の推奨に基づき [iç] が使用されているが、そうした話者でも個人的な会話では [ig] が使用され始めているとする。スイスにおいても <-ig> が [ig] や [ik] のように発音され、例えば *König* は [k'ø:nıç] と並んで [k'ø:nıg] とも発音され、*genehmigt* は [gən'e:miçt] と並んで [gən'e:mikt] とも発音されるとしている (DAW 2009: 268)。

職業話者や北ドイツにおける発音では、特に数字や頻繁に使用される形容詞 (*wichtig*、*schmutzig*、*schwierig*、*langweilig* など) においては超地域的にドイツ全土で [iç] としている。一方、(a) スイスとオーストリア西部、南バイエルンの大部分、(b) 北バイエルンとバーデン＝ヴュルテンベルク州ではフォーマルな場面でのみ (特に朗読)、(c) 中部ドイツ語圏 (特に西部、稀に東部) のフォーマルな場面では、日常語で広く使われている [iʃ]/ [iç] を避けるために [-ik] が使用されるとしている (Duden 2023: 475)。<ig> は、-lich (*königlich*、*lediglich*) の前、複合語の *Königreich* では職業話者においても、舞台発音に倣って一般的に [k] で発音されるとしている。ただ、(b) と (c) でフォーマルな場面では [-ik] としているが、それならばインフォーマルな場面では [iç] になるのか疑問が生じる。

なお、記述の効率性を考えて見出し語では [iç] としているが、[ik] も標準語として全面的に受け入れられると考えられるとしている。

3.4.1 AADG – アクセント *Kaffee* と *Kaffeemaschine*

Kaffee のアクセントは、いずれの発音辞典においても第 1 音節と第 2 音節の両方を記述しているが、第 1 音節にアクセントを置く方を先に掲載している。AADG によると、17 世紀にフランス語を通じてドイツ語に入ってきた外来語 (元々はアラビア語の *qahwa* より) ということで、フランス語と同様第 2 音節のアクセントとに、ドイツ語化した第 1 音節のアクセントの両方が使われている。バイエルン州を除くドイツでは 64% が第 1 音節であったが、バイエルン州では

第2音節が優勢で56%を占めていた。スイスにおいても第2音節が優勢（56%）で、オーストリアではほぼ全域で第2音節のアクセントが確認されている。英語からドイツ語に訳す翻訳課題では、ドイツ（バイエルン州を除いて）では第1音節がさらに増えて81%となり、東ベルギーでもさらに増えている。バイエルン州においても第1音節が12%増えて56%が第1音節にアクセントをおいている。オーストリアやスイス、リヒテンシュタイン、南チロル、ルクセンブルクにおいてはほとんど変化が見られない。

また、中部・北部ドイツにおいては第1音節にアクセントを置く形式が中心となるが、フォーマルな朗読スタイルになると、「外国風でより洗練された響きを持つ形式」（Atlas zur deutschen Alltagssprache）である第2音節のアクセントに置き換えられることがあるとAADGでは説明している。一方で、第1音節のアクセントは、英語の *coffee* のアクセントによる影響も考えられるとしている。

Kaffeemaschine では第1音節にアクセントを置く割合が上昇し、ドイツとベルギー東部、ルクセンブルクでは第1音節のアクセントがほとんどを占めている。スイスでも第1音節の割合が大きく上昇し、70%となっている。これに対して、オーストリアと南チロルでは第2音節のアクセントがほとんどを占めているが、*Kaffee* の時よりも第1音節の割合は有意に上昇しているとしている。以上のように、複合語ではいずれの地域においても第1音節のアクセントが上昇しているが、この調査だけではその原因はわからないとしている。

3.4.2 辞典類 – *Kaffee* と *Kaffeemaschine*

Siebs (1969: 46) では、第1音節にアクセントを置く形式を標準形として記述している。しかし、オーストリアではフランス語由来の多くの語のアクセントを最後の音節において発音することも記述されている（例えば、*Billard* [bil'ja:r]、*Kaffee* [ka'fe:]）。

DAW (2009) では、*Kaffee* の発音について特に説明はないが、見出し語では第1音節にアクセントを置く形式と第2音節にアクセントを置く形式の両方を併記している。

Duden (2023) では、見出し語で ['kafe] を最初に記述しながら、[kaf'e:] も一般的な発音で、オーストリアでは [kaf'e:] だけであると記している。なお、「特に北ドイツでは」の但し書きのもと ['kafə] も記述されている。*Kaffeemaschine* については、いずれの発音辞典にも記述はない。

	<i>Kaffee</i>
Siebs	'kafe, (ö.) kaf'e:
DAW	k'afe: od. ...f'e:
Duden	'kafe, allg. auch, österr. nur: ka'fe:, bes. nordd. auch: 'kafə

表2 *Kaffee*

4. 規範論的考察

発話する際に、私たちは相手が何を予期しているかを予期しながら、それぞれの場面で予期される形式を意識的あるいは無意識的に生成し、文法的、音韻論的、語彙的、語用論的なレベルで、「適切な」言語形式や表現を使おうとしている。またその際には、相手の話し方に合わせてアコモデーション (accommodation) することもある。アコモデーションとは、「自分のコミュニケーション行動を変化させることによって、他者に近づいたり離れたりする絶え間ない動き」 (Giles & Ogay 2007: 295) であり、「相互的かつ動的に会話相手との連帶感を示しながら構築したり、相手から離れたりする機能」 (Giles, Coupland & Coupland 1991: 2) である。連帶感は、家族のような小さな単位から国家や国際機関のような大きな単位まで、いかなる集団においても生じうる。人間は常に複数の集団に属しているが、ある集団への所属を示すために絶えずアコモデーションを行なっている。こうしたアコモデーションを通じて、特定の言語形式への収束が繰り返されることでその形式の使用が安定し、地域などの共同体に言語変種が発生して言語規範がノモスとして定着していくと考えられる。そのため、同じ言語変種の話者は連帶感を共有し、それがアイデンティティの形成にもつながる。個人の言語行為における予期の連鎖並びに自発的な行為から生じるアコモデーションの蓄積が、一定の変種への収束の基盤となる。こうした収束により形成される言語規範を可視化して安定化させるべく記述した言語規範典は、テシスとして標準変種の確立と普及に重要な役割を果たす。

規範の記述にあたっては、まずは何が規範を構成しているのか考えておかなければならない。von Wright (1963: 70) は、規範を「特徴、内容、適用条件、権威者、対象、場面」 (the character, the content, the condition of application, the authority, the subject(s), the occasion) の 6 つの要素から構成されていると考える。「特徴」は「義務」 (ought character) と「許容」 (may character) に分けられ、これはそれぞれ「義務規範」 (obligation norms) と「許容規範」 (permissive norms) に対応している。「内容」は「するべき・してもよい・するべきではない・してはいけない」ことを指す。「適用条件」は、所与の規範の内容に従って行動する際に満たすべき条件のことである。von Wright は特徴と内容、適用条件の 3 つを「規範核」 (norm-kernel) と呼んでいる。「権威者」は規則や命令を発行する行為者を指すが、これは組織と人の両方がある。「対象」は、規範を権威者によって特定の行為を命令されたり許容されたりする (von Wright 1963: 77)。こうした行為の命令や許容は社会的、地理的な「場面」に応じて具現化される。こうした規範を言語に当てはめて考えると、規範は言語が潜在的に持つ表現可能性の複雑さを低減させ、言語運用を容易にする機能があると説明できる。言語には社会的、地理的な変異があり、場面や各自の言語能力に応じて言語を使用しており、それぞれの場面に規範が存在すると考えられる。標準発音

の規範核を考える際には、その多様性を考慮してどの領域を記述の対象とするかを明確にし、義務規範と許容規範を記述することとなる。適用条件によって発音の変異を義務規範と許容規範に分類し、基本形を義務規範、その変異形を許容規範と考えることができる。ただし、発音規範の場合は、正書法とは異なり公的な規範は存在せず、一部の職業話者を除いてその拘束力は弱い。一般の話者は、意識してあるいは無意識のうちに地域変種を使いながら発話し、また個人差も大きいことから、標準発音の記述をする際に発音規範への拘束力が生じる職業話者を「模範」(Modelle)とみなして、調査の対象とするのが一般的である。言語使用での模範には階層性が見られ、第一次、第二次、第三次の模範がありこうした模範は一般的に社会階層に対応している (Bartsch 1987: 61)。それぞれの話者は身近な模範の影響を受けることになり、例えば地元の学校教員、医師、公務員、商店の販売員などが第三次の模範となり、超地域的な放送番組の職業話者が第一次の模範と考えられる。中心的な第一次模範からの距離が遠いほど、標準語からの逸脱は許容されやすくなる (Bartsch 1987: 62)。

発音規範の記述にあたっては、誰が模範であるかを決めるところが重要である。Siebsにより最初の発音辞典が出版された当時は舞台俳優が模範であり、DAW (2009) ではニュース番組のアナウンサーが模範とみなされている。Siebs (1969: 8) では、標準発音を純粋標準発音と緩和標準発音に分けて、地域的多様性は緩和標準発音に含めているが、標準発音とはみなされない「日常発音」(Alltagslautung) とは区別される。オーストリアやスイスの変種は、緩和標準発音として見出し語にも記述されている。また、DAW (2009) では、ドイツ語の発音には標準発音から日常語での発話まで幅があるが、標準発音は高い権威を持ち、公共・公的な場での使用が期待され、また使用されている発音と明記している。DAW (2009) は豊富な学術研究を踏まえ成果であり、発音の多様性についても前半部で詳細に説明されており、国別標準変種についてもドイツ、オーストリア、スイスと独立した章を設けている。そこでは、標準発音の定義に則って、標準発音に含められる国別標準変種と含められない地域変種を区別している。

Duden 発音辞典は 2015 年に出版された第 7 版ではそれまでの基本方針を大幅に変更しており、さらに第 8 版 (2023 年) では収録語の範囲を拡大し、音声情報もダウンロードできるようになっている。1962 年の初版から 2006 年の第 6 版までは Max Mangold が編集主幹であったが、Mangold 没後の第 7 版では Stefan Kleiner がその任を引き継いでいる。Duden (2023) においては、職業話者による発音と、教養人の発音や学校の授業の中で実際に使用されている発音に違いがあるとし、後者は当該地域の「使用規範」(Gebrauchsnorm) と位置付けている。Kleiner は AADG プロジェクトの代表者でもあり、その調査結果も Duden (2023) に活かされているので、AADG について検討したい。

AADG では「使用標準」 (Gebrauchsstandard) が主題に掲げられているが、Standard (標準) に関する考察はない。『標準ドイツ語』と『使用標準』 („Hochdeutsch“ und „Gebrauchsstandard“) のページ⁴では、話すことばにおける最善の標準語がどの言語形式であるかについては、ドイツ語圏では伝統的に幅広く合意が形成されているとしている。具体的には、舞台俳優や超地域的なニュース番組のアナウンサーが話すドイツ語や、北ドイツ、特にハノーファーで話されているドイツ語と書かれているが、こうした「合意」についての説明はない。しかし、ドイツ語の多様性については、複数中心地性により国別標準変種への収束、成文規範への収束、またそれとは反対の方向で特定の地域で幅広く用いられる変種への収束に伴う成文規範からの分散などが複雑に作用し合っており、「最善の標準語」に関しての合意が形成されているとはいえない。

「標準ドイツ語の音素体系全体」 (das gesamte Phonemsystem der deutschen Standardsprache) の記述と、できるだけ多くの地域的変異現象を中心に記述することの2つが調査データを決める際の基準であるとしている。公的な場面で話されるドイツ語は書きことばの形式に沿っていて、「標準語の通常形」 (die übliche Version der Standardsprache) がドイツ語圏の国・地域では使用されているが、そこには違いがあるとの記述があり、公的な場面で話されるドイツ語のことを gesprochenes Hochdeutsch とも表現している。つまり、AADG では、Standard、Gebrauchsstandard、Standardsprache、Hochdeutsch が使用されているが、いずれも所与の概念として扱われており、同調査でそれぞれの用語をどのように理解しているかについては触れられていない。使用規範については、実際の使用では幅広く普及しているが成文規範には記述されていない標準形や、見出しの説明に umgangssprachlich、regional などの補足が付いている形式を指すとの説明がある。Ammon (1995: 88) がいう「使用」 (Gebrauchs-) は、「模範テクスト」 (Modelltexte) での使用を基盤とし、テレビの全国ネットニュース番組や新聞記事などで実際に使われているが成文化されていないことを指しているが、Kleiner は Ammon が定義する使用規範の領域を拡大する方向で修正している。

態度調査の被験者にはドイツ、オーストリア、スイスの出身者が含まれているが、表中の数字は被験者の出身地が区別されておらず、こうした態度に地域別でどのような違いがあるのかは読み取れない。したがって、例えば [ki:na] はドイツ南部やオーストリアの使用規範とされるが、肯定的評価 38%、中立的評価 11%、否定的評価 51% という数字から過半数の被験者が否定的に評価していることになる。しかし、このデータからは、ドイツ南部やオーストリアでも否定的評価があったのかはわからない。また、[fi:na] はドイツ中部、北部やスイスの使用規範としているが、肯定的評価は 22% と低く、ドイツ中部、北部やスイスの被験者がどのように評

4 <https://prowiki.ids-mannheim.de/bin/view/AADG/KonzeptGebrauchsstandard>

価したのかを分析する必要が出てくる。つまり、当該の変異形が使用されている地域でも低く評価されているのか、高く評価されているのかが標準変種を語る上では重要となるが、こうした情報は読み取ることができない。こうしたアンケート調査の結果が Duden (2023) の見出し語の随所に挙げられているが、提示の仕方についてはさらなる検討が必要であろう。

	肯定	中立	否定
[çi:na]	82 %	11 %	7 %
[ki:na]	38 %	11 %	51 %
[ʃi:na]	22 %	18 %	60 %

表 3 *China* の発音 [ç]、[k]、[ʃ] (Duden 2023: 284)

Siebs (1969) では、純正標準発音は ['çi:na] だが、緩和標準発音のレベルでオーストリアとイスの発音として ['ki:na] が記述されている (表 3)。また、ザールラントを含むラインラント地方では [ç] が [ʃ] で置き換えられることがあり、*Kirche* が *Kirsche* と同じ ['kɪrʃə] のように発音されることを指摘しているが、この発音は非標準系なので避けるべきである指摘している (Siebs 1969: 145)。変異形 [ʃ] のことは König (1989b: 247) でも確認されており、同調査ではコーブレンツやヴィットリヒ、クーゼルなどで頻度が高い。一方、DAW (2009: 241) ではオーストリアの発音として ['ki:na] が記述されているが、イスの発音としては *Chemie*、*Chinin*、*Chirurgie* と並んでドイツと同じように [ç] と発音されるとしている (2009: 246)。このように /ch/ の変異形としては [ç]、[k]、[ʃ] があるが、発音辞典では [ç] を無標の標準形とし、[k] は国別標準変種の形式であるとしている。König の調査は「標準語」(Schriftdeutsch)⁵ の発音としているが、旧西ドイツ内的一部の地域でのみ使用されている形式である。König の調査では、各地域で生まれ育ちアビトゥア (Abitur) を所有している被験者を対象としており、Kleiner の調査でも同様に各地域の *Oberschüler* を中心にデータを収集している。こうした被験者による発音調査は学術的には興味深いが、発音辞典で記述の対象となる模範話者に該当するかについては疑問が残る。前述の通り、模範には階層性があり、できる限り地域を超えて使用されている発音を使用する模範話者を調査対象とするのが妥当と考えられる。*Oberschüler* が各地域の公的な場面で使用している変種をその地域の使用規範と考えることに問題はないが、各地域で通用している使用規範と、発音辞典に記述すべき発音形式とは異なる。発音辞典には、国別標準変種の変異形や広範な地域で使用されている変異形を記述するべきであり、実際に Siebs や DAW、初版から第 6 版までの Duden 発音辞典はいずれもその原則のもとに記述されている。Duden 発音辞

5 König (1989a) では Schriftdeutsch (書きことば) が使用されているが、「実際に話されている標準語」(tatsächlich gesprochen[es] Hochdeutschen) と説明されている。

変遷するドイツ語標準発音

典の第7版からは、極端な記述主義に傾斜していると思われる。すでにDudenのDie deutsche RechtschreibungやUniversalwörterbuchで行われている記述法を発音辞典でも採用して、見出し語でオーストリアやスイス等の情報を新たに付記した点と、幅広い実証調査を行っている点は評価できる。しかし、使用規範の適用条件の考察、それに基づいてその規範核を記述するという過程については検討がなされていないと思われる。

多様なノモスを記述するだけではテシスにはならず、ノモスとテシスは相互に影響を及ぼしあう関係にあり、テシスはノモスに基づいて記述され、ノモスはテシスの影響を受けながら生成される。ノモスとテシスは表裏一体の関係にあり、ノモスがテシスの基盤となっていることからテシスはノモスの一部でありながら、テシスもノモスに影響を及ぼしている。つまり、ノモスはテシスを包含しているが、テシスがノモスを支配するわけではない。

ノモスは場面や話者の属性、会話相手など多様な要素に基づいて変容するが、一定の条件下で見られる収束傾向を分析した上で抽出されるものである。テシス作成では実際の言語使用を調査することが重要であるが、ひとたび出版されると「正しい」発音の指針として規範性を帯びてくる。AADGのように一般の話者を調査対象とすると、地域により多様な変種が確認されることはいうまでもない。例えば上述のように、Dudenでは*China*の発音について、['ki:na]、['ʃi:na]、['xi:na]のいずれも国・地域のラベルと共に記述されているが、['çi:na]にはラベルがない。この記述から、ドイツ語圏全域で使用される無標形と、各国・地域で使用されている変異形が併存していると解釈できる。そうすると、無標形が各国・地域を覆う超地域的変異形であるのか、無標形と各国・地域の変異形は対等の併存関係にあるのかを考えねばならない。この関係性はSiebs(1969)で明確に規定されている純粋標準発音と緩和標準発音の関係性に似ているが、Dudenではそうした標準発音の階層性に関する明確な説明がない。ハレ学派では、地域的な色合いを帯びた口語表現と標準発音を峻別し、後者を記述の対象としている。多様性のあるノモスをそのままテシスに反映させると、各地域の発音を示す参考資料としては興味深いが、「正しい」発音の指針としての参照機能が損なわれる恐れがある。ノモスとしての使用標準とテシスとしての標準発音との関係性は自明ではないので、さらに詳細な研究が必要である。

* 本研究の一部は、2024年度関西大学学術研究員研究費によって行われた。

参考文献

- Ammon, Ulrich (1995): *Die deutsche Sprache in Deutschland, Österreich und der Schweiz. Das Problem der nationalen Varietäten*. Berlin: Walter de Gruyter.
- Duden (2015): *Das Aussprachewörterbuch*. 7. Aufl., Berlin: Dudenverlag.
- Duden (2023): *Das Aussprachewörterbuch*. 8. Aufl., Berlin: Dudenverlag.
- Bartsch, Renate (1987): *Sprachnormen: Theorie und Praxis*. Tübingen: Max Niemeyer.
- Ebner, Jakob (2019): *Österreichisches Deutsch – Wörterbuch der Gegenwartssprache in Österreich*. 5. Aufl. Mannheim: Dudenverlag.
- Giles, Howard & Ogay, Tania (2007): Communication Accommodation Theory. In: B. B. Whaley & W. Samter (eds.): *Explaining communication: Contemporary theories and exemplars*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum, S.293-310.
- Kleiner, Stefan (2011 ff.): *Atlas zur Aussprache des deutschen Gebrauchsstandards* (AADG). Unter Mitarbeit von Ralf Knöbl. <http://prowiki.ids-mannheim.de/bin/view/AADG>
<https://idsopen.de/article/view/3/2>
- Kleiner, Stefan (2014): Die Kodifikation der deutschen Standardaussprache im Spiegel der faktischen Variabilität des Gebrauchsstandards. In: Albrecht Plewnia & Andreas Witt (Hrsg.). *Sprachverfall? Dynamik – Wandel – Variation*. (Jahrbuch des Instituts für Deutsche Sprache 2013). Berlin/Boston: de Gruyter, S. 273-298.
- Kleiner, Stefan (2021): *Ergebnisse einer Online-Umfrage zur „Angemessenheit von Aussprachevarianten in formellen Sprechsituationen“* (= IDSopen 2). Mannheim: IDS-Verlag.
- König, Werner (1989a): *Atlas zur Aussprache des Schriftdeutschen in der Bundesrepublik Deutschland*. Bd. 1, Text. Ismaning: Hueber.
- König, Werner (1989b): *Atlas zur Aussprache des Schriftdeutschen in der Bundesrepublik Deutschland*. Bd. 2, Tabellen und Karten. Ismaning: Hueber.
- Krech, Eva-Maria et al. (2009): *Deutsches Aussprachewörterbuch*. Berlin & New York: Walter de Gruyter.
- Krech, Hans (Hrsg.) (1961): Bericht über den Stand der Arbeit am „Wörterbuch der allgemeinen deutschen Hochlautung“. Hans Krech (Hrsg.). *Beiträge zur deutschen Ausspracheregelung*. Berlin: Henschel, S.48-55.
- Mayer, Kurt (2006): *Schweizer Wörterbuch. So sagen wir in der Schweiz*. Frauenfeld: Huber.
- Siebs, Theodor (Hrsg.) (1898): *Deutsche Bühnenaussprache – Ergebnisse der Beratungen zur ausgleichenden Regelung der deutschen Bühnenaussprache, die vom 14. bis 16. April 1898 im*

変遷するドイツ語標準発音

Apollosaale des Königlichen Schauspielhauses zu Berlin stattgefunden haben. Berlin/Köln/Leipzig:
Albert Ahn.

Siebs, Theodor (1969): *Deutsche Aussprache – reine und gemäßigte Hochlautung mit
Aussprachewörterbuch.* 19. Aufl., Helmut de Boor, Hugo Moser & Christian Winkler (Hrsg.).
Berlin: Walter de Gruyter.

von Wright, Georg Henrik (1963): *Norm and action: a logical enquiry.* London: Routledge & Kegan Paul

Geschlechtergerechte Sprache ?

— gendern のノモスとテシス —

田中 慎

1. はじめに

本書の全体テーマである、ノモスとテシスとの関係、すなわち言語の使用によって徐々に形作られる基準（ノモス）と特定の権威によって人為的に課される基準（テシス）について、本稿では、ここ少なくとも 10 年余りドイツ語圏において専門家だけでなく一般に広く議論を呼んでいる gendern、すなわち「すべての性の平等を実現すること」¹を題材にこの問題を扱ってみたい。この問題がノモスとテシスを考える上で重要なのは、一方で、言語が「正しく」多様な性を反映して用いられておらず、これを修正する必要があるという考え方である gendern の数々の提案があるということ、そして他方では、gendern の数々の方策が一般のドイツ語話者の間で広く受け入れられているとは言えないということのギャップにある。

ドイツでは、性の平等、多様な性の認知という点においては、2018 年に公的な書類において第三の性が認められるなど、社会的広く共通の理解が定着してきているように思われる。そのため、言語の上での平等を推進する gendern もさまざまなレベルにおいて提案され、受け入れられてきた。大学や公的機関などでは、2000 年代初頭から gendern についての指針が設けられ²、gendern にかなったさまざまな呼称の変更などもなされてきた。一見すると、言語における多様性も広く社会のコンセンサスを得ていると錯覚する。しかし、一般のドイツ語話者における gendern の受け入れ状況はかならずしも進んでいるとは言えない。2021 年 7 月の ZDF の調査では、ハイフンやジェンダースターを用いた表現を拒否している人の割合は 71% に上った。また、ドイツの調査機関 Civey が 2023 年 12 月に行ったアンケートでは、18 歳以上の実に 80% がジェンダー表現を拒否しているという結果が出ている。この数字を見ると近年に入って gendern を受け入れない傾向は、むしろ上昇しているという見方もできる。この一般における gendern の受け入れ状況を反映しているように、近年では、gendern 表現を使用しないという逆の指針が次々と出されている。2021 年から 2024 年かけてバイエルン、ザクセンなどいくつかのドイツの州では公的文書においてジェンダー記号などの使用が禁止された。

1 Diewald/Steinhauer (2020) を参照。

2 例えば、ブラウンシュヴァイク工科大学では、2010 年に最初の指針が出され、この指針は 2017 年、2021 年と二度にわたって改訂されている (Neef 2024:108)。

このようにgendernについては、使用を通しての基準(ノモス)が形成されていない状況があり、その状況の中で「上からの」規制(テシス)が課された、そしてその行き過ぎに現在ブレーキがかかっていると見ることができる。いわば「ノモスなきテシス」の状態が現出し、テシスがノモスに働きかけるという、いわば逆の状況があると見なすこともできるだろう。以下、本稿では、このgendernをめぐる「ノモスなきテシス」という状況に際して、以下の問い合わせをすることになる。

- ・この使用実態に欠けるgendernのいくつかの試みは、システムとしての言語という観点からは正当化されうるものなのだろうか？
- ・言語がシステムとして機能する上でgendernの種々の提案が不必要だと考えられる場合、gendernの試みは放棄されるべきなのだろうか。
- ・gendernが何らかの形でテシスとして機能する場合、どのような方策がとられるべきなのだろうか。

これらの問題について以下考察を進めていくが、その前にまず「言語の正しさ」ということについて考えてみたい。gendernは言語における性の平等を実現する「正しい」言語として推奨されるわけであるが、そもそも「正しい」言語というものはあるのだろうか。そしてそこに言語学はなんらかの寄与ができる・すべきなのであろうか。gendernについて言語学的アプローチをする以上、この問題をまず考える必要がある。

2. 言語の「正しさ」について

言語学者は、通常、言語の「正しさ」については語らない。もちろん、言語学は、言語に関することすべてがその研究対象になるのであるから、言語の乱れや言語政策も広い意味での言語学の範疇に入る。しかしながら、言語学の基本はあくまで「記述」、そしてそれに基づく「説明」にある。すなわち、言語学者にとって重要なのは、「言語が現実を写像しているか否か」であり、その写像が、「より適切」であるか「より劣った」ものであるかは二次的なものとなる。Leiss (2012) は、この「現実の写像のしくみとしての言語研究」の系譜を、プラトン、アリストテレスに始まるギリシア時代から中世の思弁文法を経て、現代の言語学に連なる系譜を記述しているが、このことは、同書におけるプラトンのクラティロス『対話篇』の対話の解釈に明確に表れている (Leiss 2012: 27 ff.)。

[ソクラテス] つまりすべての語や呼称はすべて同様に正しいというわけだ?

[クラテュロス] もしそれが本当に呼称ならば。(429b)³

これに続く箇所でソクラテスは、言語の写像機能を画家によってなされる絵画的写像と比較する。そこで述べられるソクラテスの「より良い言語的写像やより劣った言語的写像も存在するだろう」という推論に対して、クラテュロスは異を唱える。絵画的写像は芸術であるのに対し、語（普通名詞）による言語的写像は世界を表象しているものであり、その際、「より良い」とか「より劣った」ということはありえないと言う。このクラティロス対話で展開された言語の写像についての考え方は、アリストテレス、中世のモディストなどを経て、20世紀のチャールズ・S・ペース、フェルディナン・ド・ソシュール、ローマン・ヤーコブソンなど現代言語学まで様々な反論を受けつつも継承されており、受け継がれている⁴。言語を「現実を写像するしくみ」として捉える言語研究、すなわち（写像）システムとしての言語研究は、言語表現の、「正しさ」、「優劣」を求めるのではなく、「言語が現実を写像しているか否か」ということが問題としてきた⁵。その意味で、言語学の立場から *gendern* について意見を述べる際には、第一に *gendern* の議論において提案されている表現方法が、写像システムとしての言語に叶ったものであるか否かを議論する必要がある。次節では、このことを踏まえてシステム言語学の観点から、現在議論されている *gendern* をめぐるいくつかの中心的な課題をとりあげてみたい。

3. 「言語学」的知見

ここ十年ほどの間、ドイツ語圏で非常に激しく議論されている *gendern* の問題について、言語学者もなんらかの形で関わることが求められており、実際、多くの言語学者が、*gendern* の議論のために、言語使用の実際に基づいた「言語学的知見」を述べている。ここでは、*gendern* について述べられている「(システム) 言語学的知見」の中でもっとも重要かつ本質的なものについて簡単に確認していこう。結論から言うと、*gendern* を推進する側から出されている言語使用の案は、システム言語学的な観点からは、言語事実を正しく捉えていないか、または、現状のドイツ語のシステムに大きな変更を強いるものであり、その労力に見合った効果は期待できな

3 クラティロスからの直訳ではなく、Leiss (2012:32) のドイツ語訳によるもの。Leiss によるドイツ語訳は以下の通り。

[Sokrates] Also sind alle Worte und Benennungen gleich richtig?

[Kratylos] Was nun wirklich Benennungen sind.

4 この系譜については、Leiss (2012) を参照。

5 もちろん、言語学の対象は、この言語の写像機能のみというわけではない。例えばローマン・ヤーコブソンが言語の6機能を記述した際にも、メッセージそのものに向けられた機能ということで言語の詩的機能を特に取り上げて議論している。本稿も、*gendern* は単に写像機能の問題としてのみ捉えられない問題であることを取り上げている。

いということになる。

以下に、gendern をめぐる議論において中心となると考えられる三つの争点について、簡単に確認していきたい。その三つの争点は以下のものである。

- ・文法性と自然性の混同の問題
- ・男性形の総称的用法 (generisches Maskulinum) の使用における問題
- ・提案されているジェンダー記号とドイツ語の音韻体系の問題

3.1. 文法性と自然性

gendern の議論では、しばしば文法性と自然性とが混同されて議論される。この混同の極端な例が以下のものである。

(1) Das Mensch lebt nicht vom Brot allein.

Mensch は男性名詞であるが、意味としては人間全体を表す。しかしながら、「男性」名詞では種全体を表せないとして「中立的」な中性使用を求めるものである。この実際の使用例として、Neef (2024: 114) は、ブラウンシュヴァイク工科大学で出された gendern 使用の指針 (2021 年版) において、伝統的な *der Dekan/ die Dekanin, der Präsident/ die Präsidentin* に対して、「中立的」な *das Dekan, das Präsident* という中性形をオプションとして挙げ推奨しているという例を挙げ、これを自然性と文法性の混同として批判している。

この文法性と自然性は、Eisenberg (2017) が述べているように、有生名詞句以外の領域では基本的にほとんど関係がないというのが、言語学的に共通する見解である。Eisenberg は以下のように述べている。

Grammatisches und „natürliches“ Geschlecht haben, betrachtet man den Wortschatz des Deutschen als Ganzes, wenig miteinander zu tun. (Eisenberg: 2017)

この発言のポイントは、下線を引いた部分の「ドイツ語の語彙全体で見ると」という部分である。このことは、次の問題、「男性形の総称使用」に深く関係する問題である。

3.2. 男性形の総称使用

男性形の総称使用については、gndern を推進する側から、男性以外の性を不可視化し、排除しているとして大きく問題視される言語使用である。

(2) a. Viele Astronauten studierten Naturwissenschaften.

b. Viele Astronautinnen studierten Naturwissenschaften.

男性形の総称使用を批判する立場では、a 文の Astronauten はあくまでも男性複数形であり、そのため男性以外の性が不可視化されているというわけである。一方で、実際の言語使用では、総称的男性形によって宇宙飛行士一般が意図され、b の女性形 (Astronautinnen) はあくまで女性の宇宙飛行士であり他の性の宇宙飛行士は指さない。これは、1930 年代にローマン・ヤーコブソンが「有標性の原理」として提示して以来、広く言語における基本原理の一つとして受け入れられているものである。有標性の原理は、言語における文法的なカテゴリーにおいて、それぞれのカバーする領域を分類する場合、それが均等に分割されることはなく、必ず一つの領域が無標（特に標識をもたない）のものとなり、他の領域がそれぞれ特別な標識を持つということである。これを文法性の問題に当てはめると、男性の形が無標の形であり、もっとも一般的な意味（すなわち性に関しては中立な意味）を持ち、女性は有標の形として特別な意味（すなわち女性という特徴）を持つというわけである。このことは、つきつめればドイツ語（や他のヨーロッパ言語）における男性優勢性を示しているわけであるが、これが言語の一般的原理である以上、文法性を廃止しない限りは「無標としての男性」は存続することになる⁶。

男性形の総称使用について、ドイツ語話者がどのように受け止めているか、すなわち男性形によって女性やその他の性は不可視化されているのかについて、Wegener (2024) は、男性形使用と女性を明示的に可視化した両性併記（上の例では Astronautinnen und Astronauten）などの表現を対照して実験を行っている。その結果、Wegener は、「この形式 (generisches Maskulinum) は、両性併記の形と比べて女性をより可視的にもより不可視的にもせず、両表現とも同様に性全体を指すもの (geschlechtsübergreifend) として理解される」（同 55）と結論づけている。このことからも、システムとしての言語という観点からは、男性形の総称使用は直ちに廃止するべきものではないと結論づけることができる。

⁶ 男性名詞の無標性については、Werner (2017) に詳しい。

3.3. ジェンダー記号のもたらす変化

gendern の議論において、上で男性形と比べた両性併記の形 (Astronautinnen und Astronauten または AstronautInnen) は、性の中立性を十分に表していないと批判されることがしばしばある。すなわち、これらの表現では、男性とならんで女性は可視化している一方、それ以外の性は無視され、不可視のままとどまっているのである。この問題を解決するために、さまざまなジェンダー記号が提案されている。

(3) a. Astronaut*innen

b. Astronaut:innen

c. Astronaut_innen

d. Astronaut/innen

単数形と複数語尾の間に挟まれた記号によって、男性、女性の二つの性に限らない多様な性が表されているわけであるが、その表記上の特異性はともかく、これらのジェンダー記号が言語学的に問題になるのはその発音である。ジェンダー記号が置かれる部分には、声門閉鎖音 [?] が入り音声上は明確に記号がない形と区別されるわけであるが、この語中における声門閉鎖音の挿入が問題となる。語中の声門閉鎖音の挿入は、慣れることによって克服できる部分もあるが、ドイツ語の通常のリズムから逸れ、内容の理解を阻害することもある⁷。

ジェンダー記号の実際の使用をより複雑にするのは、ジェンダー記号の導入によってドイツ語の音韻体系の変更をもたらすということである。声門閉鎖音で始まる性を現わす語尾 /?in/ は、これまでの母音で始まる語尾 /in/ に対して意味の区別をもたらすものになるが、このことは、音韻規則で派生される声門閉鎖音と異なり、ドイツ語に音素が一つ増えるということになる⁸。もちろん、音素体系の変化は歴史的に見ても十分ありうることであり、それ自体は新しい gendern 記号の導入の妨げになるものではないが、その際にも、人為的にもたらされた規則・規範によって結果として音韻体系に変化をもたらすということを十分に考慮する必要がある。

以上、システムとしての言語として gendern のさまざまな方策について重要と思われる点を検討してきたが、この観点からは、現状の gendern を積極的に推進する意味は見出せないということ、あるいは gendern を実現するための数々の変更には大きな労力が必要とされ、多くの

7 例えば Rohde (2024: 228ff.) はラジオジャーナリストの立場から、送り手側と聞き手側の慣れの問題を扱っている。送り手側は単純な形のジェンダー記号を使った表現には比較的すぐ慣れる一方、聞き手側から、ジェンダー記号によって理解しにくくなるという苦情も受けるということを述べている。

8 声門閉鎖音のドイツ語音素としての位置づけについての議論の詳細は、Haider (2024) を参照。

ドイツ語話者には受け入れられにくいということを確認した。

4. 言語使用としての **gendern**

純粹に言語をシステムとして見た場合、すなわち、2節で概観したように写像の手段としての言語という観点で考えると、**gendern** を「正しいもの」、「適切なもの」として積極的に推進する理由はない。一方で、言語は、単なるシステムではなく、実際に使用され、情報だけでなく感情も伝える媒体である。**gendern** の運用に際して考慮されなくてはならないのは、その指示の対象 (Referent) は人間であり、この指示対象自身が無視 (不可視化) されたり、適切な扱いを受けていないと感じているということである。使用実態に支えられていない **gendern** になんらかの規範 (テシス) を課すとするならば、この言語使用の問題を視野に入れる必要がある。

4.1. 言語使用における規範

gendern に関する規範にはさまざまなものがある。1970年代以降、女性の可視化が問題になり、その方策が進められてきた。両性表記 (Kolleginnen und Kollegen) は、その短縮形 (KollegInnen) も含め、広く受け入れられており、今では標準的なものになっていると言えるだろう⁹。2000年代に入って、ジェンダー記号や、動詞の分詞形 (Studierende など) を用いた多様な性を表す手段についても、さまざまな形での規範化が進んだ。その際、これらの規範の多くは、法律 (Gesetz) で特定の形を規制するというよりも、注意書き (Merkblatt) やガイドライン (Leitlinie) などより強制力の弱い形で出されたが、そこでは、特定の性を排除せず、かつ標準的なドイツ語の使用からの過度の逸脱を避ける形を推奨する形をとっている。

一方、強い形での規範としては、**gendern** を排除する形のものがある。2024年4月にバイエルン州では、職務規定 (Geschäftsordnung) として、さまざまな **gendern** 表現の公的な機関、学校等での使用を禁止するという強い規範を打ち出した。この「**gendern** の禁止」は、公的機関での公文書ということで範囲は限られたものであるが、2025年4月現在少なくとも5つの州で実施されている。

このように、テシスとして働く規範にはさまざまな形がありえるが、ここで規範のさまざまな形について考察してみよう。von Wright (1963:77) は、規範の構成要素として以下のものを挙げた。

⁹ ドイツの薬の広告においてこれまで30年以上にわたって使われてきた言い回しである „Zu Risiken und Nebenwirkungen lesen Sie die Packungsbeilage und fragen Sie Ihren Arzt oder Apotheker“ に代わって、„[...] fragen Sie Ihre Ärztin, Ihren Arzt oder in Ihrer Apotheke“ という言い方を用いることが2023年12月に法律の改正によって定められた。これは、両性併記は、社会的にも広まりを持ち、その意味でノモスとして定着しつつあったものが、法律で義務化されテシスとしての地位を持つことになる。一方で、2023年という時期に、ジェンダー記号を用いるなどの多様な性に配慮されていない法制化がなされたということは注目すべきことである。

規範の構成要素

(1) 特徴

「義務」 (ought character) ・「許容」 (may character)

(2) 内容

「するべき・してもよい・するべきではない・してはいけない」

(3) 適用条件

所与の規範の内容に従って行動する際に満たすべき条件

(4) 権威者

規則や命令を発行する行為者 (組織、人)

(5) 対象

規範を権威者によって特定の行為を命令されたり許容されたりする人

(6) 場面

社会的、地理的



gendern のテシスを考える際にも、これらの構成要素ごとに吟味していくことができるだろう。

実際に提案された規範においても、義務的なもの (禁止も含む)、許容されたものがあり、どの範囲で使用できるかなどを決めている。例えば 2021 年に Hamburg 州で行政文書にジェンダー記号の使用を許可したが、その際に条例 (Erlass) や法的および行政規則の変更を含むものではないことが定められた。このように、von Wright が規範核と呼んだ、規範の構成要素の中心となる部分については、gendern の規範においても、それぞれの実情 (使用実態) に合うように、さまざまな機関がさまざまな程度の規範を定めており、その意味で、単純に「ノモスなきテシス」という状態にはなっていない。

4.2. gendern の語用論：性の可視化？

von Wright の規範の要素の後半の二つの項目、すなわち誰にとって、どのような場合に規範が適用されるのかということは、gendern の議論にとって特に重要となる。表現の使用者が同時にその対象者でもある性の表記の適正な使用は、誰が、どのようなときにその表現を使うかによって多岐にわたるものであり、その要素は常に変わっているものだからである。

gendern の中心的な概念である両性の併記やジェンダー記号は、男性以外の性を可視化しようという考えに基づくものである。しかしながら、gendern を言語運用における現象だと考えると、この「可視化」についても絶対視することはできない。そもそもすべての性を可視化すること

は適切なのであろうか？また、性は常に可視化されるべきなのであろうか？

Matsumoto (2022:145ff.) は、性の多様性を扱う際に、（自然）性は少なくとも 6 つの変数に分解される複合的なものであること、その変数は固定的なものではなく使用場面とともに変わっていくものだということを示した。Matsumoto が提案した性を決定する要素は、以下のとおりである¹⁰。

- i. 生物学的性 Biologisches Geschlecht
- ii. 性アイデンティ Geschlechtsidentität
- iii. 性的志向 Sexuelle Orientierung
- iv. 自身の性表現 Gender-Expression
- v. 公的な性 Öffentliches Geschlecht
- vi. 社会システムにおける性 Geschlecht im gesellschaftlichen System

これらの要素は、i の生物学的性や v. の公的な性を除くとすべて連続体であり、男か女の二者択一ではない¹¹。また、これらの性の諸要素は、場面（公的な場面か私的な場面か、談話の相手は誰であるかなど）により可変的である。例えば、トランスジェンダーの女性で通常は男性的な性表現（服装、話し方など）をする人がトランスジェンダーであることを公表していない場合、あくまでも男性としてふるまうということが考えられるが、トランスジェンダーということを知っている人の間では女性ということになる。このように可変的な対象の人間の性や、不斷に変わりゆく場面性を考慮にいれると、性の可視化は必ずしも常に望まれることではなく、場面によっては性や性志向を隠蔽する必要性に迫られることがある。このことからも、gendern の規範化においても、流動的な場面性を考慮に入れる必要があり、義務的な規則（von Wright の言うところの ought character）は往々にして適切でない。

5. まとめ

以上、「ノモスなきテシス」としての gendern についての考察を行った。以下に簡単に本稿の内容をまとめる。

10 この性を決定する 6 つの変数は、Matsumoto (2022) が、すでにジェンダー研究で定着している性を決定する 4 つの要素（上に挙げたものの i ~ iv のもの）に v と vi を加えたものである。

11 生物学的な性は、性染色体の組み合わせで決まるが、これもかならずしも二値的なものではない。公的な性としてドイツでは 2018 年から男女の他に divers が選択できるが、これに加えて 2024 年 11 月からは性の変更の手続きが簡略化されかなり高い自由度で性の変更が可能となった。この意味でも公的な性は可変的である。

- ・言語の写像体系を記述するシステム言語学的観点からは、gendern を積極的に推進する根拠はない。gendern 記号の諸提案はシステムに反することはないが、システム自体の変更が余儀なくされ使用者（送り手および聞き手）に多くの負担をかけることになる。
- ・そのため、gendern の問題はシステムとしての言語の問題というよりは、その運用の問題である。gendern に関するテシスは、それがスムーズに運用されるかという観点から吟味する必要がある。現行の多くのテシスは、その実行可能性を考えて導入されている。
- ・また、gendern（性に関する言語表現の適切な使用）に関するテシスの導入は、場面ごとに変わるという性の性質をよく理解して進めていくべきである。

参考文献

- Diewald, Gabiela & Steinhauer, Anja (2020): *Handbuch Geschlechtergerechte Sprache*. Berlin: Dudenverlag.
- Eisenberg, Peter (2017): Das missbrauchte Geschlecht. In: *SZ.de*. 2. März 2017.
- Haider, Hubert (2024): Phonematisierung des glottalen Plosivs aufgrund politischer Korrektheit? In: Trutkowski & Meinunger (2024), 58-70.
- Leiss, Elisabeth (2012): *Sprachphilosophie*. 2. Aufl. Berlin / New York: de Gruyter.
- Matsumoto, Sora (2022): Gendergerechte Sprache: Auseinandersetzung mit Sprachpraxen vielfältiger Gendergruppen. In: JGG (Hg.). *Linguisten-Seminar: Forum japanisch-germanistischer Sprachforschung 4*, 144-162.
- Meinunger, André & Baumann, Antje (Hg.) (2017): *Die Teufelin steckt im Detail. Zur Debatte um Gender und Sprache*. Berlin: Kadmos.
- Neff, Martin (2024): Die “Leitlinie Sprache und Diversität” der TU Braunschweig. Eine Sprachwissenschaftliche Einschätzung. In: Trutkowski & Meinunger (2024), 108-134.
- Tanaka, Shin (2024): Wie kann/sollte die Linguistik zum Thema „Gendern“ beitragen? Vortrag bei der Asiatischen Germantentagung 2024 (Qingdao).
- Trutkowski, Eva & Meinunger, André (Hg.) (2024): *Gendern – Auf Teufel*in komm raus?* Berlin: Kadmos.
- Wegener, Heide (2024): Untersuchungen zur Interpretation generischer Maskulina. – die Tests. In: Trutkowski & Meinunger (2024), 33-57.
- Werner, Martina (2017): Genus ist nicht Sexus. Warum zwischen grammatischem und natürlichem Geschlecht in der Sprache zu unterscheiden ist. In: Meinunger, A. & Baumann, A. (2017), 260-278.
- von Wright, Georg Henrik (1963): *Norm and action: a logical enquiry*. London: Routledge & Kegan Paul.

シンポジウムにおけるディスカッション

シンポジウムにおいては、各パネリストの報告に続いて、全体でのディスカッションを行なった。そこでは、パネリスト間での質疑応答に加えて、会場の参加者との間でも活発に討議がなされた。本章は、ディスカッションの内容を振り返り、その詳細を記述したものである。叢書として出版するにあたり、会場にいなかった読者にもディスカッションの内容を理解しやすくするために、必要な情報を捕捉しながら記述している。

さらに井出発表における「ドイツ語圏全体としては近世に向けて、（一つの方言ではなくても）収束の方向で推移している」ことの意味について質問があった。おそらく言語変化をかなり理想化・単純化した見方で、*dtv-Atlas zur deutschen Sprache* (S. 146) で *hüs / Haus* を例にとって、新高ドイツ語二重母音化の新表記が地理的・時間的に推移する状況のモデルがその代表である。今回の報告で取り上げた写本はいずれも 15 世紀の写本であり、そこでの新表記の分布はこの言語地図のモデルとは必ずしも一致しない。言語が有機体的に時間とともに自然と変化していく、という見方は今回の分析からは否定される。言語変化の社会文化的な要因を考慮する必要がある。さらに、「標準的なドイツ語という意識」とはどういう意識かという質問があった。15 世紀において「標準的なドイツ語という意識」を想定することは今回の分析からは困難である。そもそも「標準的なドイツ語という意識」は極めて現代的な概念であり、おそらく 18 世紀アーデルンクのあたりからの意識ではないだろうか。Hochdeutsch という言い方が地理的なものから社会的なものに移行するあたりに芽生えた概念であろう。近世初期にそのような意識を想定することができるかどうか自体がまず問われなければならず、そのためには体系的な研究が必要である。ルターがいうところの *Gemeindeutsch* は上部ドイツ語をさしドイツ語圏全体での標準的ドイツ語を指しているわけではない。15 世紀後半は活版印刷揺籃期に相当するが、活版印刷本と手書き写本が共存する中で、何らかの役割分担があったと想定しない限り、新表記で印刷されたメンテリーン聖書を手書き写本で方言表記（旧表記）にすることの意義が説明できない。写本ないしは活版印刷本を介したコミュニケーションの意図など、社会的要因を考慮した上で、旧表記と新表記の競合関係もしくは共存関係を捉える必要がある。つまり、社会文化的なコミュニケーション意図のもと、旧表記と新表記が使い分けられた、と仮定することができるかもしれない。その限りにおいて、方言とは異なる「別表記」も並存するという意識はあったのかかもしれない。それが同時代に「新」表記、「標準的」と捉えられていたかどうかはわからない。複数ある方言のひとつとしての「別」方言表記と捉えられていたかもしれない。

また、テレオロギー的に現在の最終状態に変化が自然と向かっているという見方も言語有機体

的な言語観に近い。結果として「現代ドイツ語の形」が全体的に広まるが、その検証には活版印刷における表記が資料となるであろう。その形が当時「標準的」ととられていたかどうかは必ずしも確かではない。方言での活版印刷自体はもともと少ないが、アレマン方言や低地ドイツ語方言では少なからず方言での活版印刷本が存在する。いずれも新高ドイツ語二重母音化の新表記が浸透しなかった方言地域である。これらの方言での活版印刷本がなくなる時期は「現代ドイツ語の形」が定着するひとつの道標になるであろう。方言での活版印刷本がなくなる場合、それは自然発生的な現象ではなく、社会文化的な判断・決定である。このような判断が言語の形を変えているのであって、言語が自然にその形をえていっているのではないことに注意しなければならない。一方、手書き写本データベースの *Handschriftencensus* は 16 世紀までの手書き写本を対象とし、それ以降の手書き写本のデータベースが存在しないため、16 世紀以降に手書き写本でどのような表記がなされていたのかはまだ研究の余地がある。たとえば 1518 年のデュースブルク都市法は手書き写本で低地ドイツ語方言で書かれている (Arend Mihm/Michael Elmentaler (Hrsg.): *Das Duisburger Stadtrecht 1518*. Duisburg: Walter Braun Verlag, 1990) が、方言写本であることが唯一性や信頼性を示すと捉えられていたのかもしれない。

続けて、佐藤発表における家政婦のことばについて議論が行われた。発表の中で甥カールと対照的な人物として紹介した Barbara Holzmann (1755-1831) はマリア・テレジアによる言語政策的転換および義務教育の普及以前に幼少期を過ごしていたので、カールのような教育は受けていない。そのため、筆談帳には方言の音声がそのまま文字化されたようなドイツ語が綴られている。ホルツマンのドイツ語 (Der her ist Nicht zu haus Erkumt in einer stunt das köhnen Miett im spröch) が規範的な正書法から大きく逸脱しているのは階層によることばの違いによるのではないかという重要な指摘を質問者からいただいた。例えば、ベートーヴェン宅でホルツマンと同じく、料理番・家政婦として勤務していた Sali の書き込み (ich esse auch nur Ser wenig Fleisch [...]) を見ると、かなり標準的なドイツ語に近い書き方をしている。この Sali は生年は不詳であるが、1806 年生まれの甥カールと同じ世代であると考えられ、最低限の初等教育は受けていたと想定される。したがって、同じ家政婦であっても Holzmann よりも Sali が標準的なドイツ語を書いているのは、やはり学校教育の影響が大きく関係していると考えられる。ことばを分析するには出身地だけでなく、書き手の職業や社会的階層、教育の程度等の社会的属性も視野に入れる必要があることが示唆された。

高橋発表で、発音の変異形に関して、北部並びに Nordrhein-Westfalen では *Rad*、*Bad* などが短母音で発音されることを指摘した。ここで興味深い点は、*Rad* は短母音率が 39% であるのに対し、*Raddampfer* では 65% に上がるところである。この現象について、AADG は複合語で

あることから最初の母音への意識が逸らされその地域の日常語でより頻繁に具現化される形式である短母音が発生すると説明している。このAADGの説明に対して、その妥当性に関する指摘があった。むしろ2音節語であることに加えて、主要部の *-dampfer* の *a* が短母音であることにも影響している可能性を指摘した。このように超地域的発音と地域レベルの日常語との揺れは、ノモスの形成を考える上で重要である。さらに高橋発表について、他の言語レベルの規範にも、発音の場合と同じようなノモスとテシスの相互的な影響が観察できるのかとの質問が挙げられた。比較として一番上がりやすいのは正書法だが、正書法については拾い上げるノモスの対象がかなり限られており、その意味でもノモスとテシスの関係は異なるものかと思うというのが質問の趣旨である。これに対して、発音と公的な規定がある正書法との間には大きな違いがあるとの返答があった。Rat für Rechtschreibung が規定する公的正書法は、公的機関での文書作成や学校教育などで義務的な使用が求められている。これに対して、発音は演劇の発音規範から発展してきたように、主に職業上の必要から記述されており、今日では放送局のアナウンサーの発音が模範となっている。職業話者は発音辞典に記述された発音に従って発話するよう訓練をしており、また、発音辞典の作成に際しては、こうした職業話者の発音使用などの観察を主なデータとして使用している。そういう意味では、ノモスとテシスの相互関係が確認される。正書法の場合にも同様に、模範となる文章をデータとして記述していくことになるが、そこでも作家やジャーナリストなど職業上文章を作成する人たちの正書法を参考にしている。しかし、拘束力の点で発音と正書法の間には大きな違いがある。正書法は、学校教育で一律に指導されていること、発音と違って視覚的に容易に確認できることから、ノモスは収束の方向に向かいやすい。一方発音は、社会的・地理的に多様が変種が存在しており、場面や話し相手等さまざまな条件により変異するものであり、それは統制するべきものではない。そのため、発音は本質的に地理的、社会的に多様なノモスを包含するものであり、正書法とは性質が大きく異なっているといえる。

田中発表については、gendern における「ノモスなきテシス」の可能性と現実についてどう考えるかディスカッションした。ここで述べる「ノモスなきテシス」というのは、「ノモス（使用習慣に支えられた規則（性）がない状況でなんからのテシス（特定の Instanz による明示的な規範）が実行されるか）」ということである。まず現状では、gendern に関してノモスはない、あるいは非常に限定的だといえる。これは、ドイツ語話者における gendern（いろいろなレベルがあるが）の受け入れ状況のアンケート等からわかるかだろう（限定的というのは、大学などでは gendern を意識して使う人は少なくないということがある）。その上で、テシスが可能かということについて、田中発表ではテシスの内容を吟味することによってなんらかの可能性が見いだされると

いうことを述べた。つまり、「その規範はどのくらい強制力があるものなのか」(規範の性質)、「その規範はどのような範囲で有効なのか」(規範の場面)、「その規範はどのような権威からなされているものなのか」(規範の定め手) などである。このようなことから、「ノモスなきテシス」は、これらのテシスからテシスの受け手に受け入れやすい範囲で可能であり、現実も、その形を模索しているのではないかと考えられる。引き続き田中発表では、gendern に関する規範意識についての質問について検討した。gendern の運用に違和感を感じながらも、gendern を使用しないことへの不安を感じるところで、どのように規範意識を捉えるかという問題である。これも上述の「テシスの内容」との関係性で決まってくるものかと思われる。すなわち、「誰が」、「どのような場面で」、「どのような性質の規範に」従うかというレベルの問題である。田中発表では、gendern の規範そのものは言語の本質と相反しているとはいえないまでもその必然性はないということを確認した上で、現状との折り合い（実際に差別を受けていると訴える状況は無視できない）をどうするかということを扱ったが、その折り合いの際に働く「規範意識」というのは十把一絡げに論じじうことができるものではなく、その内容については、例えば von Wright の「規範の構成要素」などを用いて記述できるのではないかと述べた。

高橋発表で導入された von Wright の「規範の構成要素」に基づいて、田中発表では gendern をめぐる議論における「規範の性質」、「規範の場面」、「規範の定め手」、「規範の対象」の項目を取り上げ議論したが、そのうち gendern の議論で特に問題となるのは、「規範の対象」である。この問題について、シンポジウムの準備段階も含め議論があったと記憶している。gendern をめぐる規範の対象となる「性」やいうまでもなく、二值的なものでなく「多様な性」である。さらに、この「多様な性」は固定的なものではなくその場その場で変わるダイナミックなものであるということを確認する必要がある。例えば、Matsumoto (2022) で示されたように、性自認について公的、私的な対話などの談話状況など場面ごとに対象 (Gendern 表現の記述対象) は変異する。また、性の可視化の問題についても、可視化するだけでなく、あえて隠蔽する必要性が生じるなど、「規範の場面」という側面についても固定化された規範化から逸脱する側面を gendern における議論では考慮する必要がある。

日本独文学会研究叢書 161号

2025年10月18日発行

© 2025 一般社団法人日本独文学会

Studienreihe der Japanischen Gesellschaft für Germanistik

Nr. 161

Alle Rechte vorbehalten

© 2025 Japanische Gesellschaft für Germanistik e.V. Tokyo

ドイツ語のノモスとテシス
—ドイツ語の「正しさ」と多様性—

編集 高橋秀彰

発行 一般社団法人日本独文学会

〒170-0005

東京都豊島区南大塚3-34-6-603

電話 03-5950-1147

メールフォーム <http://www.jgg.jp/mailform/buero/>

SrJGG

ISBN 978-4-908452-51-2